ゲート　チート自衛官 彼の地にて理不尽に戦えり

メガネ二曹

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

２０××年。夏。

銀座の中心に、突如異世界へのゲートが出現し、ゲートから出現した軍勢に、民間人が虐殺された事件。銀座事件。

これを受け、国はゲートの向こうの世界、「特地」に自衛隊を派遣する事を決定した。

これはとある転生チート自衛官とその仲間の話である。

※作者がドジってプロローグが消えました。もう一度出します。

※作品名変えました。タイトル詐欺にならないよう頑張ります。

※受験が終わりました!!!再開します！

目次

プロローグ
プロローグ　銀座事件（改訂版）　1
プロローグその後　歩哨任務　4
登場人物紹介
登場人物紹介（随時更新？）　7
番外編
暁　灯弍の休日　初日前半　16
暁　灯弍の休日　初日後半　19
暁　灯弍の休日　二日目前半　23
暁　灯弍の休日　二日目後半　27
暁　灯弍の休日　3日目前半　30
接触編
転属　33
特派、出撃。　36
暁、特地へ。　38
異世界の景色　43
炎を吐く龍　48
エルフの少女　52
レレイ・ラ・レレーナ　56
勇者は王者の炎を受けて　61
炎竜撃退　64
避難民の旅立ち　68
イタリカへ　72
盗賊退治　75

トリガー、起動。 80
無双タイム 84
巨大な閃光（ヒュージスパーク） 88
地獄の黙示録（改訂版） 92
囚われの伊丹 96
騎士の到着 98
失態 102
伊丹と暁 105
ピニャの葛藤 108
帰還 111
開いたゲート 114
日本へ 118
工作員 122
国会へ 126
巻き込まれる暁 129

プロローグ

プロローグ　銀座事件（改訂版）

俺は暁　灯弌（あかつき　とういち）。
自衛官であり、転生者である。
俺は元々、某界境防衛機関のトリガー使いだった。
ある時、第２次大規模侵攻により、敵が溢れかえり、俺は戦場へ出た。
そして、トリガーが使えなくなっても戦い続け、帰らぬ人となった。
が、神様の粋な計らいにより、人格と記憶を保持したままこの世界へと転生した。
そしてこちらの大学を卒業後、陸上自衛隊に入隊。
二等陸曹まで昇進した。
そして、
突然、召集がかかり、現場へと到着。
そこは都会のど真ん中、銀座だった。

「い・き」
「お・か・つ・」
「おい、暁！」
「っ・ああ、小島か・」
「な！にボーッとしてんだよ。一応戦場だぞ？戦場。」
そういって笑ったのは、同期の小島春信二等陸曹。
お調子者で俺のライバルである。
「おい暁！小島！お前達は戦場はおしゃべりするところだと習ったのか？」
（うげっ、池田二佐・）
（なんで俺も）
「全く・戦場でくらいしっかり緊張感持ってやれんのか？」
「「申し・訳ありませんでした」」

「まあいい。ペナルティーは考えておく。いまは集中しろ。」
「池田二佐！第４中隊から連絡！敵がおそらくこちらに向かっているとのことです！」
「了解！おいお前達、気を引き締めろ！だれも欠けずに打ち上げ行くぞ！」
「「「了解！」」」
「二佐の奢りでありますか？」
「何をバカなことといってるんだ。お前達の分全部払ったら生活していけないぞ。」
「割り勘だ。」
「▪はーい」
「!!目標を肉眼で確認！」
「距離２００！」
「了解！構えろ！」
　隊員が一斉に小銃を構え、セレクタを操作し、フルオートにする。
「ブローニング！撃てるか？」
「全然行けます！」
「よし、撃てぇ―ッ!!」
　号令と共に引き金を引く。
　発砲音が鳴り響き、リコイルで肩が押される。
　隊員の小銃から、ＭＩＮＩＭＩから、車上のブローニングから、黄金色の薬莢が吐き出され、地面に落ちて乾いた金属音を鳴らす。
「撃ち方、止めーッ！」
　号令で、引き金から指を放し、空になったマガジンを外しリロードする。
（やったか▪？▪）
「暁、小島▪斉藤、藤田、死亡確認を。」
「「「了解」」」
▪小銃を構え、引き金に指を掛けたまま、ゆっくりと近づく。
「▪死んでるな。」
「▪こっちもです。」

「馬も死んでます。」
しばらくすると、もうあたりは血まみれになっていた。
「了解、戻ってこい。処理は後だ。再度警戒体制をとれ。」
「「「「了解。」」」」
そして、
銀座事件は終息した。
敵勢力　死者６００００　捕虜（逮捕者）多数
自衛隊　死者０　捕虜０
警察等　死者不明　捕虜不明
民間人　死者多数　捕虜不明

プロローグその後　歩哨任務

「ふーーぅ・・・寒い寒い」

俺は暁・灯弌（あかつき　とういち）。

昨日の戦闘で勝利して、相手勢力を撃退した俺達自衛隊は、次に警戒して、担当地域の警戒に当たっていた。

俺は小島とペアで、８時から１１時の担当である。

一番嫌な時間帯なのは、昨日しゃべった罰であるらしい。

嫌な理由は色々とある。

「おーい、暁、パック飯持ってきたぞ。」

その一つが、このレーションである。

中隊の本隊は、仮説テントで缶飯やら温食やらカップ麺などが食べれる。が、歩哨は、お湯はもちろん缶切りがない。

そのためレーションを食べる。

「あ、加熱しとくぞ。」

日本のレーションは、種類が豊富で、他の国のよりうまそうに見えるが、

米が異常にマズイ。

ふつうの白米と比べると、明らかに黄色い。

カルキたっぷりの水で炊いたような味がする。

ちなみに、日本のレーションには、加熱材が入っていて、水を入れると化学反応で

熱くなる。毎年これで火傷する隊員がいる。

「おっ、暖め終わったか。」

暁と小島は小銃を横において、レトルトパウチを開け、カレールーを米にかけた。

「いただきます。」

・・・二人はカレーを口に運ぶ。

「・・・なあ小島、」

「・・・なんだ？」

「・・・米がマズイとルーもマズく感じるんだな。」

ちなみにレーションのルーはいわゆるボ○カレーである。
「とりあえず食うよ・・」
「だな・・」
結構辛かったようだ。

「・・やることねえな・・」
「それは平和の証ですよ。」
暁はタバコをくわえ、ライターで火を着ける。
「お前それどっから持ってきた？」
「そこの自販機。」
「あ、じゃあ見回りついでに行ってくる。」
「了解。」
二つ目だが、暇なのである。
テントの中ならワンセグでテレビが見れるが、
ここでは見れない。
ラジオを聴こうにも、イヤホンは禁止なので無理なのだ。
「キョウが居ればなあ・・」
暁は、死ぬまで一緒にいた親友の名前を言ってみる。
だが、彼はもういない。
親友の物である金色だった目も、今は右目と同じ黒になっている。
「おうただいま。セブンスターが売り切れてやがった。」
「一本やるよ。」
タバコを小島に渡す。
「敵さん・・くるのかねえ・・」
「こねえだろ。あんだけ殺られたんだ。」
「そうか？」
「敵の死者、６万弱いるってよ。」
「・・敵の世界じゃ、俺らは悪魔なんだな。」
「悪魔・・ねえ・・」
暁は６４式を手に取り、歩きだした。
「どこいくんだ？」

「定時歩哨の時間だ。」
「わかった。」
暁はタバコをアスファルトに擦り付け、火を消し、自販機の横の灰皿に捨てた。

ちなみに、歩哨から帰ってきたら、小島が２佐に叱られていた。
俺がいない間に寝ていたらしい。
そのせいで次の日も同じ時間に歩哨させられるハメとなった。

装備紹介（レーションは入らない。）
６４式
６４式７．６２ｍｍ小銃の略。
８９式の前の世代の小銃。今も一部で使われている。
部品が多い。
廃棄しても大丈夫な古い武器と言うことで装備された。
鉄パチ
８８式鉄帽の略。
現在は鉄ではない。
昔の名残。
前の部分にはＶ８をセットする台座を付けられる。
Ｖ８
自衛隊の暗視スコープで、ワンセットうん十万もする。

登場人物紹介

登場人物紹介（随時更新？）

陸上自衛隊（ＪＧＳＤＦ）
暁　灯弌（あかつき　とういち）
２３歳？独身
所属　陸上自衛隊特地方面隊普通科第五戦闘団第三偵察隊
階級　二等陸曹
能力　ありとあらゆる物を固定する　魔力を糧にあらゆる力を相殺する

転生者で、死ぬ前は某界境防衛機関のトリガー使い。
記憶と人格を保持した状態での転生の為、死体の穴や左腕、両足を魔力で再生し、内臓もすべて魔力で作りなおして転生した。
体内に変質した魔力と、それを生成する器官が残っている為魔法が使える。ただし、元は魔法使いでは無い為に補助が無いと強力な魔法は連発出来ない。というか魔力の操作が出来ない。
１０歳の時から戦闘に参加していた為、戦闘能力は極めて高い。作中最強クラスだが制限がきつく、ついでに全力を出すと作り物の体が魔力に耐えきれずに自壊し、修復まで動くことすら出来なくなる。
自分が何年生きているのか正直分かっていない。体感だと２３歳、肉体年齢は１９歳、実際に生きていた時間を足すと２１歳らしい。が、正確な年齢は神のみぞ知る。
初期設定だと２５歳だった。
転生する際に神と契約しており、自覚は無いし興味も無いが、一応神の代理人(天使)。実質不老不死で、その能力故に地球が消し飛んで太陽に飲み込まれても死ねない。
人間（しかも死人）だったのを無理やり天使にしたせいで存在が曖昧で歪になっている。
亜神との違いは、神になれない事。（おそらく亜神は神様の見習い）
幼い頃、両親を目の前でまりもちゃんもびっくりなくらいグロく惨

殺されており、実際死んだ事もある人間なのもあって、生死への価値観等は一般とはかけ離れており、本来は冷めた性格のリアリスト。
感情を殺すのが得意。というか切り替えが異常。
自分を化け物と称している。
結構モテるが、彼女を作ろうとしない。
義妹の海音を撫でくりまわすのが最大の癒し。
元第一空挺団。
イタリカ戦後、「深緑の死神」「斑の悪魔」等という二つ名を付けられる。
小島春信（こじまはるのぶ）
年齢　２３歳独身
階級　二等陸曹
所属　陸上自衛隊特別地域派遣部隊普通科第一戦闘団
お調子者。ライバル。同期。
タバコを吸う。
愛すべきモブキャラである。
動かし安いし絡ませ安い。
今後出てくるかは不明。
だが、こいつがいると話を進め安い。
縁の下の力持ち。
女が好き。
意外と強く、銃剣道が強い。器用な奴。
暁をサバゲーマーにした張本人。
暁とは同期で年も同じな為、結構仲が良い。
よく暁を合コンに誘う。（暁は絶対行かない）
池田二佐に目をつけられている。
モテない
池田二佐
３８歳既婚
階級　二等陸佐
所属　陸上自衛隊第一師団１０６普通科中隊（後に銀座駐屯地で勤

務）
酒が好きでよく飲み会に皆を誘って行く。
女の子に優しい。
俺らに厳しい。
仲間思いのいい上司。
結構慕われている。
ベテラン自衛官で、かなり強い。
メリハリをしっかりとつけている。
普段は厳しいが、心の中では隊員の事を最優先に考えている優しい人。
レーション（米）のマズさを知っていて、車両の空きスペースにカップ麺を詰め込んだり
等々、部下思いの良い人である。
物語的にもう出番はなさそう。
愛妻家である。
藤田　学（ふじた　まなぶ）
２３才独身
所属陸上自衛隊特別地域派遣部隊第一戦闘団
階級　三等陸曹
サバゲーマー。
少しオタクっぽい。
暁と小島とは、同じ小隊にいた友人。
狭間陸将
所属　陸上自衛隊特別地域派遣部隊
階級　陸将
特別地域派遣部隊全体の指揮を取る、特派の責任者。
東大を卒業してから二等陸士として入隊し、コツコツと昇進してきた
正真正銘の凄い人。座右の銘は「叩き上げ」。
暁の力と過去を知る数少ない人間。
第三偵察隊

伊丹　耀司
３３歳バツイチ
階級　二等陸尉
所属　陸上自衛隊特別地域派遣部隊普通科第五戦闘団第三偵察隊隊長
自他共に認めるオタク。
オタクとしては一方的な消費者タイプ。
モットーは「食う、寝る、遊ぶ！その間にちょっとの人生！」（本人談）
とある人の調べだと、平凡な大学を平凡な成績で卒業、教育隊ではブービー
（最下位の人はケガによって伊丹の下に）
その後三尉に着任、勤務態度は不可にならない程度に可、
業を煮やした上官に幹部レンジャーに放り込まれ、すぐに「止めて良いですか？」と
上官に連絡。上官は「止めたら休暇（コミケの日）は無しだ。」というと「頑張ってみます。」
なんとかクリアしレンジャー隊員に。
その後も勤務態度に難（なん）ありとして三尉に留められていた（本人はクビじゃなければ降格位別によかった）
その後休暇中（夏のコミケに行く途中）銀座事件が発生。とっさに避難誘導にあたり、
多数の命を救ったとして二尉に昇格。
という異様な経歴の持ち主。
いつもはサボったりしているが、自分を養ってくれている、自衛隊と、国への恩は忘れていない。（原作者談）そのため有事の際はしっかり働く。
防衛大臣とは中学生の頃からのオタク仲間らしい。
余談だが、好みは魔法少女。
倉田　武雄
２１歳独身

階級　三等陸曹
所属　陸上自衛隊（中略）第三偵察隊
ケモナー。
富田　章
階級　二等陸曹
所属　陸上自衛隊（中略）第三偵察隊
レンジャー持ち。
栗林　志乃
２４歳独身
階級　二等陸曹
所属　陸上自衛隊（中略）第三偵察隊
脳筋爆乳馬鹿女。
伊丹達に、胸全部筋肉じゃね？と密かに言われている。
格闘徽章持ち。

航空自衛隊（ＪＡＳＤＦ）

海上自衛隊（ＪＭＳＤＦ）
暁　宏城
４９才
階級　海将補
暁を引き取った人。
海と船が大好きで、昔は上陸して良くても護衛艦から
おりなかったらしい。
特地の人間
テユカ・ルナ・マルソー
１６５才
炎竜に襲われ、焼けた集落の生き残り。金髪碧眼のハイエルフ。
第三偵察隊により救助された。
エルフの中でも希少な存在で、寿命はほぼ無限？と言われている。
噂では、彼女以外にも生き残りがいるらしいが・・・

レレイ・ラ・レレーナ
１５才
第三偵察隊が訪れた、コダ村の外れに、師匠と一緒に暮らしていた魔導師。
アニメでは水色の髪をしているが、銀髪。
様々な理由も有り、人に甘えようとしない。
論理的に物事を考え、基本無表情だが、感情を表に出すのが苦手なだけ。
姉が居る。
ロゥリィ・マーキュリー（ロゥリィ・エム・マーキュリー）
９６１才
第三偵察隊が、コダ村難民達と行動していた際に、興味本意で付いてきた
黒いゴスロリに似た神官服を着た、エムロイに仕える亜神。
亜神になった際、肉体の年齢は固定された。
幼く見えるが、９００才超えの合法ロリ（またの名をロリババア・・・
おっと、こんな時間に誰だろう？）
身の丈に合わない巨大なハルバートを軽々操り、各地を放浪していた。
付いたあだ名は「死神ロゥリィ」「漆黒の亜神」等々。
その他
神様
その名の通り神様。暁とは長い付き合いで、転生前からの知り合い。
管轄は不明。複数の世界を行き来している。
一応高位の神様だが、その威厳は一切無い。
暁と契約し転生させた張本人。
ちなみに、過去に転生前の暁に半殺しにされている。

井場　康太郎（いば　こうたろう）
２３才

サバゲーマー。
小島の大学からの友人。
ロマン武器とも言われるスナイパーライフル（エアガンや電動ガンやガスガンは、法律の規定で威力、弾速、射程の最大数値が決まっているためどんな武器でも大体変わらない）をあえて使うなど、思い付いたらやっちゃう奴。
シュン
１７才で死亡
所属　界境防衛機関ボーダー玉狛支部
階級　Ｂ級隊員
本名は鏡　瞬介（かがみ　しゅんすけ）。
前作の主人公にして、転生前の暁。
古株のボーダー隊員。
旧ボーダー時代からボーダーに居て、第一次大規模進攻の際に敵のトリオン兵に捕獲され、
連れ去られた。
その後自力でその国を脱出し、中立国で二年間兵士をしたあと、偶然遠征にきていた隊員と共に帰還。その後ネイバーを庇い、Ｂ級に降格。そしてひょんな事から幻想入りして、しばらく過ごし帰還して、第二次大規模進攻で市民を庇い串刺しになって死亡した。
過去に彼女を病ませ、恋愛がトラウマになるが、恋愛なんて嫌だと思えば思うほど好意を抱かれてしまう。
現在はそれなりに吹っ切れた模様。
この頃で既にチートとなっており、幻想郷では戦闘体が壊れたことが２回のみ。しかも内一回は自滅。妖怪を素手（戦闘体）でフルボッコにしたり、トリガー無しで吸血鬼に勝ったり、天狗に飛んで追い付き焼き鳥にしかけたり、中々高位な神様を半殺しにしたり等、この時点で強さがおかしい。
左目が金色。右目は普通に黒。左目は死にかけの友人から移植してもらった。（親友はその後すぐに死亡）
めちゃくちゃ勘がいい。

好意を向けられるとすぐに気付く等、珍しいタイプの（元）主人公である。

キョウ
前作に登場した、暁の親友。
一人で異世界に放り出された中学生のシュンと共に警備兵として戦っていた。
その後、隣国との戦闘で被弾。
片目の視力を失っていた暁に左目を提供し死亡した。
その後、魂が左目に残り暁の中で生き続けており、幻想郷で復活。
暁と頭の中で会話していた。
暁の死亡により成仏したようで、転生した暁の左目も右目同様黒くなってしまった。
射撃と近接格闘の師匠でもあり、かなり強い。

暁　海音（あかつき　あまね）
暁　灯弌の義妹。中1。
お兄ちゃん大好きである。暁の野郎、羨ましいでヤンス。
部活は吹奏楽部。トランペット担当。
子供扱いされるのを嫌がり、普段は甘えたりしない。（甘えたいと思っているが我慢している）
が、ほんの稀に灯弌に思いっきり甘える。
怖い物が尋常じゃなく苦手で、暁が空挺団にいた頃に親と行った習志野の駐屯地祭で隊員達がやっていたお化け屋敷（俺は行ったことないけど結構怖いらしい）
に一人で入り、途中で腰を抜かし大泣きした。困り果てた隊員が灯弌を呼んで、装備を着たままの灯弌におぶられて退場した。ちなみにその後灯弌は展示演習に遅れそうになった。
何故かおぶった後の灯弌の迷彩服の背中が湿っていたらしいが、理由は不明。
灯弌以外に撫でられるのはイヤ。

雷　恭子（いかずち　きょうこ）
海音の友達。中1
ダメ兄貴（提督）製造機。
一体何人の司令官をダメにしたのか・・・（↑尚、これを書いた人もダメにされた模様。）
電　結衣（いなずま　ゆい）
海音の友達。中1
優しい。可愛い。
身長にコンプレックスを感じ、毎日牛乳を飲んでいる。
灯弐曰く、「養いたくなる」。
「ナスは嫌いなのです」
響
海音の友達。
名前が思い付かない。
クールな性格だが、デレる時もある。

番外編
暁　灯弍の休日　初日前半

9月下旬。
特地　陸将室
「入ります」
「おう。入れ。」
ノック不要と書かれたドアを開けて、暁が部屋に入り、狭間陸将に敬礼をする。
「お呼びでしょうか！」
「ああ。立ったままなのもあれだ、座ってくれ。」
暁と陸将は向かい合ってソファーに腰かける。
「今日から休暇らしいな。」
「？はい。午後にこっちを出て、3日後の5時位に戻ります。」
「そうか。ゆっくり休んでくれ。暁海将補によろしく言っといてくれ。」
「親父は居るか解りませんよ。海大好きですし。またどっかの護衛艦に乗りに横須賀でしょうよ」
暁は苦笑いで答えた。
暁海将補。もとい、暁　宏城（あかつき　ひろき）は、暁を引き取った本人であり、暁が自衛隊に入るきっかけの一つでもある（宏城は海自に入って欲しかった）
性格は根っからの船乗りで、海が大好きな人である。
「それで・・ここからが本題だ。」
「はい。」
「最近こういう話があってな。休暇中に尾行されていた、と。」
「尾行？」
「ああ、顔は中国か韓国人だと思うっていっててな、」

「はあ。」
「他の国も特地の情報は喉から手が出るほど欲しいものだ。下手すると自衛官でも何でも拉致してくる可能性がある。」
「・流石にそれは無いんじゃ」
「俺達だってそう思いたい所だ。だが、そういう話が出ている以上、無視する訳にもいかなくてな。」
　と苦笑いで９ｍｍ拳銃と紙と黒い手帳を取りだし、テーブルに置いた。
「これを持っていってくれ。」
「いいんですか？いくら自衛官でも、何もないのにに持ってたら捕まりますよ？」
「そのための・・これだからな。」
　陸将が黒い・手帳を開く。
　そこには暁の顔写真と、警視庁の文字があった。
「警察と自衛隊の人事交流ってあっただろ。」
「ああ、警察官と自衛官を一時期交換するっていう」
「ああ。今回はそれを利用する。防衛省から警視庁へ頼んでくれたらしくてな。」
「随分スケールの大きい話ですね。」
「まあ、上としても無視は出来んだろうしな。」
「さて。暁灯弐二等陸曹！」
「はっ！」
　暁と狭間は立ち上がり、暁は直立不動になる。
「四日間、帯銃と、緊急時の発砲を許可する！」
「はっ！」

「暁、おっせーぞ」
「わりい小島、話が長引いた。」
「お前も、コレの話か？」
　小島は手で拳銃の形を作る。
「ああ。陸将から直々にな」

「ったく。うらやましいぜ」
「そうでもねえよ。緊張して肩こったし」
『開けますよ』
門の開閉担当のひとの声がすると、門を覆っていたドームの扉が開いた。
「んじゃ、行きますか。」
暁と小島は、暗い門の中に消えていった。

暁　灯弍の休日　初日後半

「ＧＯ！ＧＯ！ＧＯ！」
「ヒット！」
「っしゃあキルった！」
銃を持った男達が、フィールドを駆け、モーターを響かせた小銃で撃ち合いをする。
休暇初日の午後、暁と小島は、サバイバルゲーム、略してサバゲーを戦りにきていた。
ゲートを越えた後、銀座から小島の実家に行き、置いてあったエアガン（電動ガン）、迷彩服、
マガジン、ＢＢ弾、ゴーグル、ローダー等をもって仲間（自衛官や会社員）と野外フィールドに
来ていた。
「２時１５ｍにアサルト二人、その奥に一人！」
暁はそう叫び、バリケードに身を隠し、手にした８９式小銃を構え、バリケードから身を半分出して、射撃する。
相手も木の影に隠れながら撃ちかえしてくる。
そして暁の横で応戦していた小島が被弾した。
「痛って・・ヒットぉ！」
小島は両腕を上げ、ヒットと言い、セーフティへと歩いていく。
今回のルールはフラッグ戦のリスポーン有、復活無限では被弾から３分はセーフティで待機、
武器はラバーナイフが禁止である。
「リロード！」
暁が周りの味方に言い、空マガジンを弾帯で後ろに着けているダンプポーチに放り込み、
腰の右側の弾嚢から新しいマガジンを取りだし、エアガンに差し込む。
「少し進むぞ！」
隣の味方が暁達に伝え、手で、３．２．１とカウントを初め、

「ＧＯ！」と小さな声で囁くと、暁を含めた三人がバリケードを飛び出し、前のバリケードや木の幹の裏にすべりこむ。
「一人やったぞ！」
「ヒットぉ！」
後ろのバリケードに残って射撃していたＭ４の人が言うと、１０ｍ位先で、「ヒット！」と言いながら歩いていく敵がいた。
「チャンスだ！凸れ凸れ！」
敵が一人減ったので、残りの敵が隠れている木の幹へ突っ込む。
隠れていた敵がＭＰ５Ｋを連射して、一人が被弾してセーフティへ向かう。
当たらなかった暁達は近くの敵をを一掃して、
「前方クリア！」
と後ろに叫ぶと、味方が５人位、銃を構えてゆっくり全身してきた。
そのなかには、リスポーンした小島や、別行動だった仲間の、井場と藤田も居た。
そして適当なバリケードの影に座り、軽いミーティングを初める。
「この先の広場を右にぬけるとＣフラッグ取れるんだよな」
「絶対守り居るだろ・・あれ砦の中じゃん。中に複数居ると厳しいだろ？だったら少し遠回りだけど左行ってＢフラッグ狙ったほうが・・」
「てか広場のやぐらの上とかに居んだろ。バリケードこっち側少ないし、大人数だと入りきらん。」
「かといって少数で行くのもな」
「遠周りだけど、一旦戻って集落ステージ経由でＢフラ狙おうか」
「とりあえず、ここの守りに3、集落へ3、あと一人はセーフティまで戻って三人位連れてこい。そしたら3人凸組へ行かしてお前はここに戻ってこい」
「「「「了解」」」」
ミーティングを終え（多分実際はこんな連携しません。コイツらは全員知り合いや仲間です。）、各自が配置に着く。
暁と藤田は凸組、小島と井場は防衛である。
暁達は、藤田を先頭に、ゆっくりと森を進む。

そして何事も無く集落の前まで来た。
すると藤田が小声で、
「暁はここで援護頼む。居るかもしれない。」
集落ステージは、左右に遮蔽物等が多いため、待ち伏せがしやすいのだ。
「行くぞ」
藤田がハンドサインでそう言うと、警戒しながら入っていく。
暁は迷彩服の襟を立てて伏せ、景色に溶け込み、８９式の二脚を立て、伏せ撃ちの体制でアイアンサイトを覗き、引き金に指をかける。
「」
静かにサイトを覗いていると、集落からモーターの駆動音がして、藤田が被弾した。
暁は照門と照星を合わせ、芋っていた敵を撃つ。
残っていた味方二人と、芋二人が被弾して残りは敵一人と自分一人となる。
暁は息を止め、グリップを握る手の力を抜きセレクタを操作してセミオートに切り替え、狙いを定め、一発射撃した。
発射されたＢＢ弾は敵の足に辺り、被弾。クリアリングできた。
すると集落のスピーカーから、
『チームブラボーがＡフラッグを獲得！ゲーム終了！』
というアナウンスが鳴り響き、暁達のチームは敗北した。
結局小島達は凸を止めきれず、フラッグまで到達されたらしかった。

「ただいまー」
「あらお帰りなさい。」
「お帰りなさい！」
「ありゃ、結構身長伸びたなー」
暁は半年ぶりに会った義妹の頭を撫でる。
「とーいち！私はもうレディなんだから頭撫でないで！」

すると義妹の暁　海音（あかつき　あまね）は頬をぷくっと膨らませた。
「ごめんごめん。もう中一だもんな。」
暁はそう言い撫でるのを止め、元自分の部屋に向かう。
（その時、海音が物足りなそうな顔をしていたが、気づいていない。）
「ふう。ただいま。」
半年ぶりに部屋に入ると、そこには机と椅子、ベッドやタンス位しか出したままになっていなかった。
迷彩服（自衛隊の）や９ｍｍ拳銃、レッグホルスター等が入った鞄を机に置き、椅子に腰掛け、何となく机の上のパソコンを起動した。
するとログオフで中断してあったらしく、何かのパスワード入力画面が表示された。
海音がつかったのかな？とか思いながらタイトルを見て、暁は驚愕した。
ファイルの名前は、「宝物庫」。あまり量は無いが、※※※や（禁束事項です）などの動画や画像が入っているファイルである。（紙の本は、何故かすぐに海音にバレる。）
しかも５重のパスワードをかけていたのに、いつの間に最後のパスワードまで突破されていた。

暁　灯弍の休日　二日目前半

休日2日目。朝7時55分。
ジリリリと騒音を放つ目覚まし時計のアラームを布団から右手だけ出して解除して、
心地いい暖かい布団と朝の日差しを浴びながら二度寝をしていた時だった。
ドアが開き、俺のくるまった掛け布団が大きく揺られた。
「とーいち！起きて、もう8時よ！」
犯人は、我が義妹だった。
揺さぶっても起きないとわかると、愚かにも今度は布団を引き剥がそうとする。
が、中一の女子が力で23歳の現役自衛官に叶うハズもなく、引き剥がすのは不可能だった。
「ねえお兄ちゃん、お願い。起きて？」
今度はおねだりだ。
いつもの俺ならここらで「ったく、しょうがないな。」とか言って起きるが、今日はいくら義妹でもそうはいかない。昨日サバゲーをして疲れているのだ。
それに特地の任務を忘れてゆっくりできる貴重な休日だ。どうせなら午後5時まで寝たいのだ。
「海音～！そろそろ学校行きなさ～い！」
「は～い…」
母に呼ばれ、海音は渋々部屋から出て行った。
階段を降りる音と、「行ってきまーす」の声を聞いた後、俺は意識を手放した。

午後1時。俺は妹のただいまと、その友達三人のお邪魔しますという声で目を覚ました。
四人が階段を昇る音がして、俺の部屋のドアが開き、四人が入って

きた。
「もう！まだ寝てる！とーいち！起きて！」
「お兄さん、みんなで一緒に買い物行こ？」
どちらも却下です。と、俺は心の中で呟く。
さっきも言ったが俺は５時位までこの布団のぬくもりを満喫したいのだ。
それに買い物なんてめんどくさい。女の子と買い物にいくと色々気を使ったりしなくてはならない上に、外に出たら尾行されかねない。
尾行している人間が血迷って何かやらかそうものなら、多分すぐに眉間を９ｍｍ拳銃でぶち抜くだろう。外す自信は全く無い。妹や友達に手を出されたら躊躇わずに引き金を引く自信がある。
だが仮にそうなったら、大勢の民間人が居るなか発砲、射殺したと言うことで左翼連中や野党、マスコミなどに叩かれること必至だ。
俺にも自衛隊にも家族や妹の友人にもデメリットがてんこ盛りだ。まあほとんどの確率でそんな馬鹿なことやらかす奴はいないだろうが。
でも、その事を言って断ることも出来ない。一応機密になっているのだ。
「むー・・どうやって起こそう・・」
「・くすぐる？」
「とーいちはくすぐり効かないのよ・・。」
海音の言う通り、俺はくすぐり効かない。昔はある程度効いたが、今はその部分がトリオン製なので、くすぐったいという感覚が存在していないのだ。
「じゃあ・全員で上に乗っかるとか。」
「でもそれは可哀想なのです・・。」
「お兄さんと一緒に買い物行きたくないの？」
「それは行きたいです。」
「じゃあやろ？」
「はい！」

おい。
そして十秒位たつと、体の上に四人が乗っかって来た。だが現役チート自衛官はこの程度余裕だった。
五分たっても全く反応が無いため、あきらめて四人は降りた。
すると、一人がまたベッドに乗り込んできて、どこで覚えたんだか、俺の左腕を引っ張り出し、俺の左腕を両手で抱きしめ、胸を押し付けて、「ねえ起きてよお兄さん～」と言う。
だが残念なことに俺にはそういう趣味は無い。それに無い胸を力任せに押し付けた所で何も思わないのである。
しばらくすると、諦めたのか、ベッドから出て行った。
「あっ！私良いこと思い付いた！」
と言ったのは我が妹である。
何かを思い付いた妹は部屋から出て、しばらくしてトランペットを持って戻ってきた。
何でもこいや、絶対起きねえぞ。と思っていた俺は、この後猛烈な勢いで飛び起きた。
海音がトランペットをかまえて、何かを吹いた。それを聞いた俺は反射的に飛び起き、凄まじい速さで靴下をはき、ベッドから出て、ハンガーに掛けてあった迷彩服（３型）を素早く着る。
「とーいち！おはよう！」
上のボタンをしめようとしたときに海音に声をかけられ、状況を理解した俺は、手を止めた。
俺が飛び起きた理由。それは海音が吹いた、「起床ラッパ」だ。
毎朝このラッパを聞くと、自衛官は一斉に飛び起き、凄まじい速さで着替え、点呼を取る。
毎日繰り返されて染み付いた癖が、ここで出たのだ。
ひとまず落ち着いた俺は、海音の方を向き、両方の頬っぺたを軽くつねった。
「このやろ！俺の安眠を妨げやがって！」
「いらいわ！はらしれよ！」（訳▪痛いわ放してよ！）
「わかったよ。」

と、俺は海音の頬っぺたから手を話す。
「もう！そもそもとーいちがこんな時間まで寝てるのが悪いのよ！」
と頬っぺたを膨らませる。可愛い。
「罰として買い物に付いてきて！」
結局買い物に行くはめになった。

暁　灯弍の休日　二日目後半

「とーいち！どっちの方が似合う？」
「お兄さん、これ可愛いよね！」
「これ、似合ってますか？」
「一緒に選んでくれないかい？」
（わかるわけねえだろ畜生）
灯弍は、大寝坊の罰として、妹達の買い物に付き合わされる事となり、、車で15分程のショッピングモールに来ていた。
そして絶賛付き合わされ中なのだが・・・ものすごく困る。
全くわからないのだ。
女子など程遠く、戦闘尽くしな人生を歩んできた灯弍だが、その上自衛隊というおしゃれなどと程遠い場所に行っている。
毎日駐屯地で見るのも着るのも戦闘迷彩服、ジャー戦、ジャージにODのシャツ、時たま礼服だけ。外出の時だって、大体は、着なれてしまい、何故か皆買ってしまう緑のシャツに動きやすそうなズボンである。
ちなみに現在の灯弍の服装は、適当なベージュのズボンに、背中に第一空挺団と書かれ、胸に空挺徽章がプリントされたOD色のシャツ（灯弍いわく、落ち着くらしい）、
海音がダサいと言うので仕方なく羽織った白い薄手のパーカー（無地）という、おしゃれ？なにそれ？美味しいの？
というような服装だった。
只でさえなかったセンスを、自衛隊で根こそぎ刈り取られた灯弍には、服装にきをつかう中学生の相手など、出来るわけがない。
いっそのこと適当に言ってしまっても良いのだが、それを妹達が着るとなると、適当に言っちゃ駄目だよなぁ・・・なんて感じになり、一生懸命無いセンスで頑張っているのだ。
「そうだ！とーいちの服も選んでくるね！」
中学生達は元気に服を選びに行った。
ちなみに、四人が選んできたシャツは、三人がカッコいいシャツに

対し、灯弌の好みを知る海音は、地味な深緑のシャツ持ってきた。
ちなみにこれは、センスが絶望的な灯弌への軽いイヤミである。
選んでくれたシャツはせっかなので全部買った。

「じゃ、とーいちは待ってて！私達だけで行くから！終わったら電話するね！」
「はいはい。気を付けろよ～」
海音達がガラスの自動ドアの奥に行くのを見送ると、灯弌は階段を降り、吹き抜けの中央の休憩スペースのベンチに腰掛ける。するとケータイがなった。
「もしもし。」
『「商品」を見つけた。そちらはどうだ。』
「ご苦労さんです。今のところ問題なし。「商品」の数は？」
『在庫は5だ。店頭に2。そちらから確認できるか？』
灯弌は背もたれに寄りかかり、素早く周囲を確認する。すると、微妙に違和感を感じる男を見つけた。
「一つ見つけた。」
『了解。「購入」するか？』
「いや。おそらく客に手を出さない。「予約」を頼む。」
『了解。何かあれば連絡しろ。』
電話が切られ、ため息をつきながらケータイをバッグに入れ、バッグの中の拳銃を確認し、すぐに抜けるよう、位置をサッと整え、立ち上がる。
「ったく。たかが自衛官一人にここまでやるかよ。いい迷惑だ。」
ため息混じりに小さく呟くと、喉が乾いてきたので、自販機へ向かった。

「ただいま。」
「ただいま！」

「おう、お帰り。」
買い物からかえってきた灯弌と海音をむかえたのは、父である海上自衛隊の海将補、暁宏樹だった。
「おうクソ親父、また護衛艦か？」
「お前上官に向かってその口の聞き方か？なめてんのか？たしかに護衛艦に乗ってきた。」
「家じゃ階級なんか忘れて気楽にやろうぜとか言って笑ってやがったの親父だろうが。で、何に乗ってきたんだ。」
「イージスの「あしがら」だよ。てか俺そんな事言った？」
「言ったよな？」と灯弌が海音に聞くと、「言ってたけど酔っ払ってたから覚えて無いんじゃないの？」
「ほら言ったじゃねーか。酒に呑まれて自分の発言も覚えてないのか？」
「うるせえな。船乗りは酒に呑まれ波に飲まれず。ってな。てかお前が言えたことじゃねーだろ。すぐべろんべろんになりやがって。人の事言えねえよな？」
「とーいちもお父さんも同じ位よ。あんまりお酒飲むとお母さんと私が大変なんだからね！」
海音がぷくっと頬を膨らませて言うのに、反論出来ずに、灯弌も宏樹も「すいませんした。」
と頭を下げた。
その時キッチンで微笑みながら母親がパシャッと撮った写真には、椅子に座る小さな可愛い女子中学生に、陸上自衛隊と背中に書かれたＯＤのシャツを着た若い自衛官と、海自の制服を着たおっさん自衛官が頭を下げているというなんともシュールな光景が写されていた。

暁　灯弌の休日　3日目前半

土曜日朝6時半。
暁の自室で、駐屯地よりも少し遅い起床ラッパが音量控えめで鳴った。
昨日同じことをやられたにも関わらず、暁は飛び起きた。
「とーいち！おはよう！」
朝一番に聞いた声の主は、学校の制服であるセーラー服を着てラッパを持った義妹の海音だった。
「はい。これ着替え。」
海音はそういって持っていた衣類を灯弌に手渡す。
「なんだこれ。陸自の第三種夏服じゃねーか。」
灯弌が広げた服は、陸上自衛隊の第三種夏服。
上は半袖の夏服で、左胸にレンジャー、空挺、射撃徽章が取り付けられ、右胸には「特派　空挺普通科　第十八空挺小隊　暁　灯弌」という文字が刻まれたプレートがピンでしっかり固定されていた。
肩には深緑の階級章がついている。が、二等陸曹を表す、桜と、「く」の字に似た二本の線が無くなり、深緑の布だけとなっていた。
下はスーツのような濃い緑の夏服長ズボンだ。
「お父さんがこれ着て下こいって！私は学校の準備をしてくるわね！」
海音が元気に部屋を出てった。
灯弌は、状況を半分理解出来ないまま、第三種夏服を着た。

「おはよ」
「おう、おはよう。」
階段を降り、リビングに入ると、宏樹が新聞を読みながら、顔だけ向けてあいさつしてくる。
灯弌は自分の椅子に座った。
「親父、なんで俺こんなの着なきゃいけないんだ？」

「ん？ああ、今日、俺の代わりに海音の学校公開に行ってくれねーか？」
「何でだよ。」
「緊急の会議だししょうがねえだろ。俺は多分行ってやれねえ。」
「まあ・行くのは全然いいんだが。」
「ん？なんだ、あっさりＯＫして。絶対「尾行者とか居るかも知れないし周りの人間が危ない」とか言いそうだったのに。」
「学校位人がおおけりゃ、かえって安全だろ。」
「まあ、そうだが。」
「っと、俺が聞きたいのはそっちじゃなくて、この服の事なんだよ！なんで学校公開に制服着てかなきゃダメなんだ！」
「半分お前のせいだろうが。服ほとんど全部洗濯に出しやがって」
「学校公開行けと先に言ってくれりゃのこしといたよ」
「まあ過ぎたことに色々言ってもしょうがねえ。諦めろ。」
　宏樹がいうと、暁がため息を付いた。
「別に俺は良いんだけどよ・浮くだろ。周りから。普通居ねえよ？自衛隊の制服着て学校行く人。」
「ところがどっこい。海音の学校は場所が良いから海自の隊員の息子、娘が結構いてな？体育祭とか、仕事の合間に来る隊員は制服のまま来るの多いぜ？」
「マジですか・なら良いけど、俺、拳銃持ってかないといけないんですけど・」
「撃つ場面なんて多分ねーだろ。一応持っとくだけもっとけ。バッグから出すなよ。」
「当たり前だ・にしても、どっから俺の制服持ってきたんだよ。」
「練馬駐屯地からだよ。送られてきた。お前ロッカーに置きっぱなしで特地行ったらしいな。池田っていう隊長が頑張ってこいって言っといてくれって。」
「あー。道理で制服無い訳だ」
　ろくに探しもせずに新しい制服を買ってしまったことを悔やむ。
「ま、とりあえず行ってくるわ。」

「おう。行ってこい。」

その後、暁は海音の学校（中高一貫校なのでかなり広い）で迷い、教室に入ると質問攻めになったりした。

接触編

転属

銀座事件から数日後。某駐屯地。
暁は、練馬駐屯地から転属となって、第五戦闘団へと配属された。
午後１１時‥
「あれ、伊丹三‥じゃなくて二尉じゃないですか。昇進おめでとうございます。」‥
「ああ、暁か。」
伊丹は走りながら答える。
いまは飯前のランニングをしている所である。
「すっかり時の人ですね～二尉は。」
「銀座の英雄、二ツ橋の英雄とか言われて週刊誌やら新聞やらに載って。」
「良くないよ‥いろいろ疲れて‥」
「ここんとこずーっとあの事件の後始末。ろくに寝れてないんだよ‥」
「俺もですよ‥まあやっと落ち着いてきたから良いじゃないっすか」
「まあね‥」
「‥で、あんなに楽しみにしてた同人誌即売会には？」
「‥中止だよ‥」
伊丹は肩をガックリと落とす。
「あっ、誰かと思えば有名人の伊丹二尉じゃないですか！」
男が後ろから走ってきて、暁に並ぶ。
「自分、八幡駐屯地から来た、倉田です！伊丹二尉と同じ部隊になれて光栄っす！」
「ん？ああ、よろしく」
「いやーいいなー有名人は！」
「きっとモテモテなんだろーなー！」
「うっせえ！」

「・・ところで二尉、隣の方は？」
「ああ、俺も同じ部隊の暁。よろしく。」
「よろしくお願いします。」

12時　食堂
「はあ～。何でこんなことになったんだろうな～。」
「昇進して大臣から証書貰っといてバチ当たりっすよ！」
「別に望んで昇進したわけじゃねーよ。」
「・・ずいぶん、欲の無い人なんですね、」
「・・この人は昔から仕事より趣味優先だからね。」
「ちょっと違うぞ。俺は趣味に生きる為に仕事してんの。」
「・・はあ。」
「変な人だろ？」
「うるせえ！」
「・・あの、伊丹二尉、」
「ん？」
「俺、実はあの日即売会にいってたんすよ。」
「マジで?!」
「それなのに俺は何もできなく「戦果は?!今日、家に来ないか？」」
「伊丹さーん、話位聞いてあげてくださいよ「なあ～良いだろ倉田ぁ～
同じ部隊の仲間だろ～」・・ダメだこりゃ」
「・・楽しそう」・・

「不潔ですっ！まさか二尉にそんな趣味があったなんて！」
倉田は両手で腕を抱えて走る。
「ごめんごめん倉田、許してくれって」
「伊丹さん、マジでそんな趣味だったんですか・・・残念だ・・」
「ねーよ！」

数日後
「これが、支給された、戦闘服４型です。」

倉田は戦闘服を渡す。
「へー、これが？」
「なんか軽くて動きやすいな。」
「これから、他の隊も順次これに切り替えるそうです。」
「ほう。」
「ん？じゃあなんで俺らの隊に優先的に届いたんだ？」
「あ、確かに。」
「それは・・そういう事だと思います。」
「・はい？・」
「そういう事って何だよ。」
「つまり、二尉の良くおもわ無いことが、起こるかも知れないということです。」
「良くないこと・・・ねえ。」

特派、出撃。

『当然ながら、その土地は地図には載っておりません！』
『どんな自然があり、どんな動物が生息しているのか。そして、どのような人々が暮らしているのか。・・・』
「大変だねえ、首相も。」
　暁はハアッと小さくため息をつく。
「ま、どうせ俺らが行くんだろ。実質、話し合いだけで解決するようないさぎよい人間じゃなさそうだったし。」
　と、小島はうどんのどんぶりをテーブルにおき、箸でテレビを差す。
「これ、自衛って言えんのかな？」
　と、小島は続ける。
「ま、また攻めてきたら人死ぬだろ？門をこっちで確保して、門の奥で敵と協定でも結べばこっちに攻めてこねえだろ。俺らはあくまでも日本国民と国を守る為の自衛隊だぜ？守る為には多少手を汚すことだって承知の上だろ」
　と暁は語る。
　要するに、門の奥から攻めてくるから排除＝自衛行為
　攻めて来ないよう門を確保＆門周辺を占領＝自衛行為
　ということである。その後暁は「あくまでも俺の考えだけど。」と付け足す。
「ま、死ぬのは特地の敵勢力だけじゃ無いだろうけど。」
　と小さく呟く。
「自衛官か？」
「殉職者が出ないのは理想だけどよ。実際は多分出ちまうだろうな。でも俺が言いたいのは自衛官じゃなく、いや、米、中、露、とかの人間だよ。」
「なんでだよ」
「どこの国も、お宝に夢中なんだよ。他国の工作員ってのは色んな国に居るからな。・・・結局最大の敵はこっち側かもな。こりゃ俺も殉職覚悟だな。」

暁はまたため息をつく。その時、テレビの首相がこう言った。
『我々は、特別地域への自衛隊の派遣を、決定いたしました！』

しばらくたったある日。銀座。
そこには、戦闘服４型を着て、深緑の鉄帽を被り、防弾チョッキを着て、規則的に並ぶ特地方面派遣部隊の隊員達であった。
暁もその場に居る。が、戦闘服は３型で、手にする小銃は８９式。そして居る場所は門の前のシャッターの前だった。
特派（特別地域派遣部隊の略）の第５戦闘団に属する暁がなぜ？という人には説明する。
戦闘でトリガーを使用した場合、味方が混乱、最悪暁に敵意が向く可能性がある為、
幹部へ暁の説明をしておく必要がある。
という立派な理由が付いているが、実際は、暁が第一陣で特地に送られる隊員ではなく、ある程度の準備が整った後に特地に行く残留隊員になってしまったからである。
と、いう素晴らしい理由で後続の追加戦力となったのだが、行くまでやることねーなら
銀座の警備でもしていて下さい。という事らしい。
ちなみに小島は特派の第１戦闘団として先に特地に行くらしい。
周りの目を気にしつつ後ろを見ると、ドームの重そうな鉄の扉が開いた所だった。
合図で７４式戦車のエンジンが咆哮をあげ、動き出す。
そのあとに続き、七三式トラックや、高機動車が続いて、ゲートの奥へと消えていく。
そして門の前は静まり返った。
暁は戦場に赴く同僚、先輩達に敬意を込めて、ゲートの奥の闇に向かって直立不動の敬礼をした。
もううっすら門から砲撃の音が聞こえてきていた。
暁は、自衛官の無事を祈り、自らの職務に戻った。

暁、特地へ。

ある日。
銀座のゲート前。
入念にチェックを受ける人影が一つ。
暁である。
「すみません、両手上げて貰えますか？」
「あ、はい。」
言われた通りに両手を上げると、
ポケットの上等を軽く叩かれる。
何故こんな検査をうけているかって？
特地に行くからだ。
諸々の理由で特別地域派遣部隊と出発出来なかった暁は、
やっとの事で特地に行ける事となったのだ。
だが今行くのは、理由がある。
暁の特地行きは、資材の運搬もかねているのだ。
一応大型の免許を持っている為、
ついでにトラックで資材を持ってきてくれ、という事らしい。
確かに、俺の迎えの為に高機動車をだすのもあれだし、
完全装備で歩くのもあれな為、合理的ではあるので、文句は言わない。
「これで終了です。装備はもう少しでお返しします。」
「あ、ありがとうございます。」
と、軽く敬礼をする。
トラックの助手席に、テッパチを置き、無線で特地の幹部自衛官に連絡をし終えると、
小銃をもった検査官が来て、小銃を返してくれた。
「では。頑張って下さい！」
と、敬礼をしてくれたので、ドアを閉めて、敬礼し、エンジンをかける。
ゲートを覆うドームの大きな扉が開く。

誘導に従い、ゆっくりとアクセルを踏み込み、速度を出さずにゲートへ入る。
「うわ真っ暗だよ。」
後ろのドームの扉が締まり、光が遮断され、ゲート内は真っ暗になった。
トラックのライトをつけるが、あまり前が見えないのでハイビームにして、
何も無いトンネルを黙々と進んでいく。
すると、前に光が見える。
出口だ。
まっすぐに出口まで進み、ライトを消す。
そしてゲートから出る。
真っ青な青空が目に飛び込む。
窓を開けると、澄んだ空気が肺に入っていく。
「特地か・・でも何か実感わかねえな。」
ゲートを抜けてまず見えるのはプレハブの大きな建物とコンクリートの壁、
そして土を固めた?壁と、自衛隊の「特派」と小さく書かれた車両である。
自衛官の誘導で、トラックを駐車する。
キーを抜き、運転席を降りると、汚れた作業着姿の施設科の隊員が小走りで来て、敬礼をした。
暁は敬礼を返し、キーを渡す。
そしてすぐに歩きだす。
歩きだして少したったころ、聞き覚えのある声で名前を呼ばれた。
「よう、暁。」
振り向くと、柳田二尉が立っていた。
すかさず敬礼をする。
「お久しぶりです、柳田二尉。」
丁寧?に挨拶をする。
柳田二尉。

簡単に説明すると、エリート街道を歩いている自衛官、である。
プライドが高く、まあエリートにありがち?な、蛇みたいなあまり好かれない優等生タイプ
である。
「お前さんに伝言だ、先に狭間陸将のとこにいきな。」
柳田はそれだけ言って、歩き始める。
「わざわざありがとうございます。」
そう言って、少しホッとした表情になった暁は（何故かとは言わない）陸将の所へと向かった。

「入ります!」
「おお、暁。座ってくれ。」
暁と言葉を交わしたのは、陸将（多分陸上自衛隊で一番高い階級）の狭間である。
この人は、東大を卒業後、わざわざ一般過程で二等陸士（二等兵みたいなもん）
で自衛隊に入隊し、コツコツと昇級して、陸将にまでなった、正真正銘のスゴイ人
であり、転生直後の暁の面倒を見て貰った、暁の恩人である。
「さて、どうだ?特地は。」
「まだ駐屯地の中しか見てませんし、分かりませんよ。でも、空気が美味しいです。」
「それは結構な事だ。」
と軽く微笑む。
「お前は伊丹二尉率いる第三偵察隊に編入して貰う。だが、今回のメインの議題は他でもなく、お前の事だ。」
一瞬で目付きが真剣になり、それにつられ、暁も目が真剣になる。
「トリガー・試製戦闘支援機は自分の判断で使用していい。但し、できるだけあまり人目の多い場所で使うな。」
「了解。」
「能力とやらも同じだ。だがむやみやたらと使うなよ。」

「了解。」
「伊丹と桑原陸曹長には説明は済んでいるが他の三偵の隊員には説明していない。必要に応じて説明してくれ。以上だ。」
暁と狭間は同時に立ち上がり、直立不動で最敬礼する。
「暁　灯弍二等陸曹！第三偵察隊への編入を命ずる！」
「了解！」
こうして、暁は、第三偵察隊への加入が決定した。

「今日付けで第三偵察隊に所属する事となった、暁　灯弍であります！よろしくお願いします！」と、ガラでも無くビシッと敬礼して言う。
が、その緊張感は、すぐに砕けた。
「って事だから、みんな仲良くしてやってくれ。」
と、緩～い小学校の担任のように伊丹が言うと、
暁は苦笑して、偵察隊の面々も同じような反応をする。
「二尉はかわりませんね。」と言うと、
「そんな短期間で変われる訳無いだろ。」と伊丹が返す。
「隊長、知り合いですか？」
小柄で巨乳のＷＡＣ（女性自衛官）が話かけてくる。
「ん？ああ、昔っから同じ部隊でね。」
「昔っから良くしてもらってるんです。」
ふーん？と、ＷＡＣが若干白い目で暁を見る。（後で知ったが、栗林と言うらしい。階級は同じ。）
「なんですかその白い目」
「いや、隊長と同じオタクなのかなーって。」
栗林は、よくも知らない癖に、キモヲタ死ね。と思うタイプらしい。
もちろん本当に死んで欲しいとは思って無いし、危なくなれば助けるが。
「いや、コイツ、俺みたいなオタクじゃねーよ？」
「何か隊長の言うことって信じられないんですよねー」
「はは、まあゲームとかマンガは好きですけど、そこまでは無いかな。」

「へ～」
と、あまり興味がなさそうに答える。が、伊丹の次の一言で態度が変わった。
「コイツ、レンジャー持ちだぞ。元空挺だし。」
「マジですか?!」
と、栗林は急に暁を少し尊敬の眼差しで見る。
栗林は、強い男が好きだそうだ。
ちなみにだが、栗林は格闘徽章を持っている為、結構強いらしい。

異世界の景色

暁が到着してから2日後。
午前8時30分。
「隊長。点呼完了。集合完了しました。」
「ん、ああ、ありがとうおやっさん。」
桑原陸曹長の報告を受けて、伊丹は軽く敬礼をする。
「んじゃ、いこうか！」
伊丹に続き、列を組み、第三偵察隊のメンバーは武器庫に入る。
小銃と拳銃、銃剣を取りだし、マガジン（弾倉）を受け取り、
勝本や古田は、追加でパンツァーファウスト（対戦車弾）とミニミ軽機関銃を取りだして、
列を作って武器庫から出る。
舎前で小銃の消炎制退器を閉め直し、
部品の脱落防止の為に黒いビニールテープを要所に巻き付ける。
最後に銃床にビニールテープを八の字型に巻き付ける。
そして地面に座り、配布された弾をマガジンに詰めていく。
一人が持つマガジンは基本6本。
一本につき20発入るので、合計120発も入れる。
小銃のマガジンに7．62mm弾を入れ終わると、9mm拳銃に弾を込める。
古田陸士長はミニミの箱弾倉に、金属製ベルトリンクで繋がれた5．56mm弾を、丁寧に詰めていく。
「終わったかー」
伊丹の緊張感の欠片も無い声が響くと、偵察隊メンバーは立ち上がり、
銃剣、9mm拳銃をレッグホルスターに入れ、小銃を持つ。
「乗車ー！」
桑原陸曹長のかけ声で、暁、倉田、伊丹、黒川が高機動車へ乗り込む。
倉田がキーをひねり、エンジンがかかる。

「よーし、乗ったか？」
伊丹が後ろの７３式トラックと軽装甲機動車（ライトアーマー）の方を見ると、
７３式トラックの窓から、富田がｏｋサインを出す。
ライトアーマーは、上部ハッチから笹川が１２．７ｍｍ重機関銃の軽い点検をしていた。
それが終わったのを見計らい、伊丹は無線機のマイクのプレストークスイッチを押して、
「前へ！」
と声をかける。
倉田がアクセルを少し踏み、高機動車が動き出す。
その後ろに、７３式トラック、ライトアーマーが続く。

「ねえ伊丹隊長、」
「なんだ暁、」
アルヌスを出て１０分。穏やかな自然を横切る高機動車の中で、暁が呟いた。
「隊長、俺ら今日何処でなにするんすか？」
「ああ、少し奥まで行くつもりだよ。」
「奥？」
「ああ、お前知らないんだっけ。俺ら、お前が来るまでに、この辺りの村や集落には行ったんだけど、それ以上行ってないんだ。だから、今回はその一つ奥の集落に行ってみようと思ってるよ。」
「了解です。」

伊丹率いる三偵は、コダ村、という村に着く。
「ちょっと待ってろ。」
伊丹はそう言うと、年配の男性の所へ行って、
「えっと・・さ、サヴァール、ハル、ウグルー？」（こんにちは。ご機嫌いかが？）

と話かけ、男性と話始めた。
「何て言ってるんです？」
「出発前に赤本を渡しただろ。気になるなら自分で調べてみろ。」
暁は桑原陸曹長に言われ、赤い表紙の本を取りだし、ページを捲り、会話を聞いて翻訳を試みる。
が、勿論ゆっくりとは言え、会話を聞きながらページを捲り、単語を一つずつ探すと言うのは時間がかかり、無理があった。
無理を悟った暁は、そっと本を閉じ、村の外の高機動車の座席に放り投げ、車内で待機することにした。
しばらくすると、無線機から伊丹の声が聞こえたので、プレストークスイッチを押して応答する。
『あ、暁か？』
「はい。どうしたんすか？」
『出発するって運転手組に言っといて。もうすぐ戻る。』
「了解了解。」
『んじゃ。』ザッ
「暁さん、行くって？」
「あ、聞いてたの？」
倉田はキーをひねり、エンジンをかける。
その間、暁は、他の車両に無線で連絡して、座席に座り、鉄帽を取った。
「そういや次どこいくんでしょーね？」
倉田が運転席から話かけてくる。
「うーん、まあ近くの行って無い集落辺りじゃない？出発前に言ってたし。」
「今度は普通の人以外がいるといいなー」
倉田がぼやいた。
「倉田って人外が好きなのか？」
「そうっすね・特にけもみみ娘とかですかね!!」
倉田は若干興奮気味に言った。
「あれ、暁さんはそう言う好みってあります？」

「え、俺ー？それ俺に聞いちゃうの？」
「興味ないんすか～？せっかくの異世界ですよ―？夢は持たないと！」
「まあそりゃあな？」
　暁は苦笑して言う。
「もうあっちで見たしな…妖怪だけど……」
「ん？何か言いました？」
「なーんでもねーよ」バシッ
　暁はそういって、軽く倉田の鉄帽を叩く。
「なんだよ～好み位良いじゃないですか～」
「俺にオタク趣味はねーよ」
　なんていう話をしていたら、伊丹達が到着したので、
　出発することにした。

「は～、良い景色だねえ」
「このくらい、北海道にだってありますよ。もっとこう、妖精とか飛んでるのを想像してたんすけどねぇ」
「まあそんなに甘くはねえだろ。倉田、ここだけの話、次の集落、人じゃない種族が居る可能性大だ！」
「マジっすか!?やったぁ～！」
　運転中でなければガッツポーズしそうな勢いだ。
「おっ、倉田、その小川を渡ったら左に行ってくれ。」
「了解です。」
「暁、他の車両にも一応言っといてくれ。」
「了解。」
　桑原曹長に言われ、無線で他の車両に左折することを伝える。
「おっ、あの森だな？」
　目的地と思われる森が見え、伊丹は助手席で双眼鏡を覗きこむ。
「隊長、意見具申します。森の前で夜営しましょう。」
「そうだね。暁、悪いけど連絡しといてくれる？」
「はいはい。」

そして森を目指してゆっくりと、オリーブドラブ色に塗装された三両の車両が
走っていった。しかし、森から煙が立っていたことに、まだ誰も気づかなかった。

炎を吐く龍

「燃えてますねえ」
「そうっすねえ」
　森の集落を目指して移動していた第三偵察隊。
　移動中に、倉田が森から立ち上る煙を見つけ、
　森が見渡せる丘へと移動したのだ。
「大自然の脅威っすね」
「と言うより、怪獣映画です。」
　双眼鏡を覗いていた桑原曹長が言うと、伊丹や暁も双眼鏡を取りだし、覗く。
「あれま」
　伊丹が気の抜けた声で言う。
「首一本のキングギドラか？」
「おやっさん古いな～そこはリオレウスとかでしょ？」
　倉田が桑原に呑気に話しかける。
「そこはエスピナス希少種でしょうに」（エスピナス希少種　モンスターハンターシリーズに登場する大型モンスター。）
「あれ、暁二曹、フロンティアやってるんすか？」
「まあね～昔っからモンハンはやってるよ。高校のゲーマーの先輩とやってた。（作戦室でだけどな）」
「あれ？エスピナスって毒じゃなかった？」
「希少種は空から炎の塊飛ばしてエリアの一部火の海にするんですよ。」
「ほ～そうなのか？」
「そうなのだ」
「？」
　桑原曹長は、ドラゴンと聞くとブルース・リーを連想してしまうような年代の人なので、
　話についていけず、首をかしげていた。
「伊丹隊長。」

声がした方を向くと、いつの間にか栗林が立っていた。
「どうしますか？このままじっとしている訳にはいきませんが。」
「うーん・・ん？」
「どうしたんすか？」
何かに気づいたような伊丹の表情をみて、暁が尋ねる。
「なあ、あのドラゴン、何もないただの森を焼く習性があると思うか？」
「ドラゴンの習性に興味がお有りでしたら二尉がご自分の目で確かめてみてはいかがでしょうか？」
（なかなかキツイ物言いだなあ）
「ねーえ栗林ちゃ～ん俺一人じゃ怖いからさあ、付いてきてくれる～？」
「わたくしは嫌です。」
「だろうね・・暁、来てくんね？」
「いいですけど、今行ったらコゲ肉ですよ。」
暁が呆れたような顔で言う。
「心配なのもわかりますけど、死んだらもとも子も無いですよ？」
「わかってるよ。」
「心配って・・何がです？」
倉田が伊丹の顔を見て質問する。
「コダ村の村長が言ってた集落でしょ？」
伊丹の代わりに暁が答える。
「?!やっべえ!!」
勝本達が声を上げ、車両に乗り込もうとするのを
伊丹が手で制した。
「今行ったってこんがり肉だ。ドラゴンが居なくなって、ある程度火が治まるのを待とう。」
「・了解。」
伊丹、暁、桑原を除く第三偵察隊の面々は、苦虫を噛み潰したような表情で森を見た。
そして結局、夜が明けて雨が降るまで、炎は治まらなかった。

「・・無残なもんだな・・」
炎が治まったのを見計らい、集落跡に入った第三偵察隊は、ひとまず生存者が居ないかを確認していた。
「よっ・・と。」
家の瓦礫と思われる物を強引に持ち上げると、
人間の腕の形をした炭が見つかる。
「・・辛かったろうな・・ゆっくり眠んな。」
そう呟くと、遺体等の集計をしている栗林に報告しに行った。

一時間弱集落を探索して、あらかた遺体や焼けた家の集計が終わると、
伊丹は井戸に腰かけた。
暁ら他の隊員は、ここで暮らしていた人々の生活が伺えるような物
（皿など。）
を探している。
水筒を取りだし、水を音をたてて飲むと、集計を終えた栗林が報告に来た。
「二尉。この集落には大きな建物３軒、中小の建物が２９軒ほどありましたが、発見できた遺体は２７体で、少なすぎます。おそらく、倒壊した建物の下敷きになったか、ドラゴンに捕食されたのだと思われます。」
栗林の報告を聞き、伊丹はため息混じりに話す。
「一軒に三人家族だとかんがえても、３０軒で９０人か・・大きな家にもっと人が居たとしたら、１００人程度・・見つかってないのは下敷きにされたか・・隠れているか・・食われたかか・・むごいもんだねえ。」
「酷いものです。」
伊丹はまた水筒に手をかける。が、中身がもうほとんど残っていないため、ちょうど自分の後ろにある、井戸に木のバケツを放り込む。

すると、何故かコーン・・・という音が響く。
「？」
「何でしょうね？」
栗林がライトを取りだし、井戸を照らすと、伊丹と栗林が井戸をのぞきこむ。
そこには、頭にコブが出来た、金髪で耳が尖っている人間？だった。
「人だ！人がいるぞ！人命救助！」

ロープを井戸に垂らし、もう片方を七三式トラックの牽引用フックに引っ掛けて固定する。
井戸を傷つけないよう、井戸とロープの間にマットを挟む。
そして伊丹が、ロープを辿って降りていく。
「落とさないでくださいよー」
「わかってらあ」
井戸の下まで着いた伊丹が、金髪の少女をおぶる。
「おやっさん、上げて！」
桑原に言われた富田がトラックをゆっくり前へ進めて伊丹を引き上げていく。
そし伊丹の頭が井戸からでてきて、
「人命救助！急げ！」
と言われ、暁が伊丹におぶられている金髪少女を高機動車に乗せると、黒川が簡単な診断を始め、暁は追い出された。

エルフの少女

「エルフ!!エルフっすよ!!二尉!!」
「そうですねえ」
「しかも金髪のエルフ!!くぅ～!希望が出てきたぁ～!」
「倉田、エルフ萌えだったっけ」
「違います。どっちかって言うと、艶気たっぷりの方が好みです。妖艶な魔女とか、サキュバスとか、ドラキュリーナとか、肉食系の獣娘のおねえさんとかですね!!」
倉田が力説して、暁は苦笑いし、伊丹は・・・様子から見て脳内で想像もとい妄想でもしているのだろう。そして少し身震いしてこっち（現実）に帰ってきた。
「居るといいな。」
暁が苦笑まじりに言うと、
いや、絶対に居ます!と、倉田は握り拳をして燃えて、いや、萌えていた。
伊丹は「がんばれよぉ」と、少し引き気味である。
「暁!倉田!サボってないで作業を手伝え!!」
「あっ、すんません!!」
作業を忘れて話に夢中になっていた所を、桑原曹長に呼ばれた。
倉田は暁よりも先に反応して背筋が伸びていた。
どうやら教育隊時代に桑原曹長に散々しごかれたのを思い出したのであろう。
作業に戻った暁と倉田は、携帯円匙で埋葬の為の穴を掘り始めた。
雨の後で程よく土が湿って土が掘りやすかった。

しばらくして埋葬やら何やらが終わり、車両に戻り、アンテナを立て、アルヌス駐屯地に連絡した。
当初の目的は、今までより少し広い範囲で集落を巡り、諸々の情報を得るという物だった。

が、人間（エルフだが）を保護したとなれば、無理につれ回すわけにはいかない。
お上の方々も同じように考えてたらしく、「とりあえず保護した人物を連れて帰ってこいや。」と言うような答えが帰ってきた。
「とりあえず、途中コダ村通って帰りましょ。桑原曹長、そんなことで宜しくお願いします。」
桑原曹長は、「わかりました」と言い、各車両に指示を飛ばす。
そして伊丹の、「前へ！」の掛け声で、焼けたエルフの集落を出発して、コダ村へと向かった。

第三偵察隊の車両が、もときた道を行きよりもスピードを出して走り抜ける。
「ドラゴンが来たら嫌ですね。」
「言うなよ。ホントになったらどうすんだ。」
暁と伊丹がそんなことを言っていると、車両が激しく揺れた。
「喋ってると舌噛みますよ～」
なんて運転手の倉田が言う。
道とは言え、アスファルト等で舗装されているわけでは無い。
高速で走る車両の揺れはサスペンションでも殺せず、車両は激しく揺れた。
黒川が床に寝かせているエルフが揺れで頭などを打たないかと注意しながら、血圧や脈をはかっている。が、看護資格を持った彼女も、エルフなんかの標準血圧等は到底解らず、首をかしげ、何故か伊丹に「エルフの標準血圧ってどの位ですかね？」と尋ねている。
そんなこと僕にわかるわけないでしょなんて顔の伊丹はだまったまま、顔から何故か漫画のような汗をかいていた。
黒川は、「人間と比べると数値は低いが、バイタルは安定している。」と報告した。
「呼吸、脈拍、体温、血圧等は安定していますし、汗を不自然にかいたりもしていませんし、人間ならば・・大丈夫と言えるんですが・・」

と困った顔で言う。
「その辺も調べなきゃいけないね。上に言ってみるよ。」
伊丹が言うと、黒川が頷いた。

コダ村に着くと、至って普通に迎えられた。
警戒されるわけでもなく、歓迎されるわけでもなく。
まあ三偵の自衛官からすれば一番気が楽であった。
伊丹が村長を見つけ、単語帳と赤本を取り出して、カタコトで、教えられたとおり、集落があったが、ドラゴンに襲われて焼かれて全滅していた。というような説明をたどたどしい言葉でした。
村長は、「全滅してしまったのか。痛ましいことだ。」と言うような事を言っているようだ。
伊丹は辞書を引いて、「えっと、私達、森、行った。大きな、鳥、居た、森、焼けた、村、焼けた。」と言う。
ドラゴンをこちらの言葉でなんと言うのか解らないので、鳥と言った。そしてメモ用紙に、
森で見たドラゴンの絵を書いて村長に見せる。
伊丹は見たものを覚えるのは得意だそうだ。
村長はその絵を見て青ざめた。
「こっ、これは、炎龍・・」
「えっと、炎竜、炎、出す、人、焼けた。」
「人ではなく。エルフじゃ。エルフ。」
村長は「ｒｅ　ｎａｍｕ。」という言葉を繰り返した。どうやらこっちで、エルフという意味らしい。
伊丹は単語帳に「ｒｅ＿ｎａｍｕ」エルフ　と書きたした。
「ありがとう。炎龍とこと、良く教えてくれた。おかげで速くにここを逃げる準備が出来る。」
「村、捨てる？」
「逃げるのじゃ。炎龍からできるだけ遠くにな。」
「どうします？」

と暁が伊丹に耳打ちする。
「うーん。ほっとく訳にもいかないでしょ。大変だけど、手伝いくらいしようか。」
「そうっすね。そうしましょうか。」
こうして、コダ村住民の逃避行の準備が始まった。

レレイ・ラ・レレーナ

「急げ!!」
「炎龍が来るぞ!!」
村人達があわただしく村中を走り回っている。
コダ村の村長と話終わってから五分もたっていないのにもかかわらず、
ほとんどの家があわてて村から逃げる準備をしているところを見ると、事の重大さがわかってくる。
「痛ってーな!どこ見てあるいてんだ!」
「うるせえ!邪魔だ!」
一部では喧嘩すらおきている始末である。
「は～。もうちょいスムーズにいかないもんですかねぇ」
「あーあーあー、喧嘩おっ始めたよ・・お、栗ぼー行った。」
喧嘩をしていた男二人がいつの間・・にか栗林に足を払われ、突然のことにキョトンとした表情で地面に座り込んでいた。
「ほら!さっさと奥さん手伝う!!くだらない喧嘩はおしまい!」
「はっ、はい!」
言葉が通じているのかは解らないが、栗林の言葉で、それぞれ自分の家に駆け足で戻っていった。
「お～怖。・・」
「ですね・・。」
暁と伊・・丹が苦笑する。
「隊長!暁!来てください!」
「おやっさん?今行きます。」
桑原曹長に呼ばれた伊丹と暁は、村の出口付近へと向かった。

コダ村のはずれの、一軒の家。
賢者カトー・アルテスタンとその弟子レレイ・ラ・レレーナが住まっていた家である。

彼らもまた、炎龍の知らせを聞いて、村を出る準備をしていた。
家の前の荷車には、どう考えてもロバ一匹で動かなそうなほど、本や木箱等が山ほど積み込まれていた。
老人が家から出してきた本を見て、少女がどこにどうやって乗せるかを考えていた。
「お師匠、これ以上積み込むのには無理がある。」
「どうにかならんか？レレイ。本は重要で貴重なものじゃ。」
「解っている。書物は持っていくべき。この場合、コアムの実とロクデ梨の種を置いていくのが合理的。」
そういってレレイと呼ばれた少女は、荷車から袋を下ろし、本を乗せる。
「全く・・・炎龍の活動期はあと５０年は先だったはずじゃ・・・いい迷惑じゃよ・・・」
ほぼ空き家のようになった家からぶつぶつと炎龍に文句を言う老人が出てきた。
「お師匠。速く乗って欲しい。」
「あ？儂にお前さんのような少女に乗っかる趣味などない・・・」
まで言ったところで、レレイが空気を固めて老人目掛けて放つ。
「っ・・・やめんかレレイ！魔法とは神聖な物じゃ！むやみに使ってはならん・・・！」
そういってレレイの隣に座る。レレイは手綱を握り、手綱を振り、ロバを進ませようとする。
・・・が。
「進・・・まんのぅ。」
「やはり荷物を乗せすぎた。」
「だっ、大丈夫じゃ！儂らにはコレがあるではないか！」
と、くすんだ木製の杖を掲げる。
「魔法とは神聖な物じゃ。むやみに使ってはならん。」
と、・・・先ほどの老人の言葉をそっくりかえした。
「うっ・・・」
「・・・でもこの際、仕方ない。」
・・・

レレイが杖を上げると、荷車が浮いた。
「すまんのぅ、レレイ。」

「もっと力を込めて押せっ！」
「「せ～のッ！」」
「おやっさん、何…あ～、コレね。」
「見事にはまってますね。」
桑原曹長に呼ばれて列の先頭付近まで来ると、ぬかるみにはまった荷車を懸命に押している仁科一曹達がいた。
「暁。お前も入ってくれ。」
「了解です。」
桑原曹長に言われ、伊丹に小銃を預けると、仁科一曹の横に付き、荷車に手をかける。
「行くぞ！せーの！」
「「せ～のッ!!」」
思いっきり力を込めて荷車を押す。ぬかるんだ地面に半長靴の爪先が少し沈んだ。
「もう少しだ！せーの！」
「「せ～のッ!!」」
もう一度力いっぱい押すと、少しずつ荷車が前へ進み、ぬかるみをこえた。
「ありがとう！助かったよ！」
「いえいえ。とんでもないです。」
桑原曹長に、荷車の持ち主がお礼を言っていた。
「ふ～。終わった。」
その近くの道端で、暁は水筒の水を飲み荷車を押していた仁科達が膝に手をついて休んでいた。
「なんだ暁、全然平気そうだな。」
「空挺団の訓練よりよっぽど楽ですよ。」
なんて会話を桑原としていた矢先、何かが折れる音と何かが崩れる

音、そして馬と人間の悲鳴が響いた。

「なんじゃ？これは。」
賢者カトーとその弟子レレイが乗る馬車は、村の道の列に並んでいた。
その列の動きが突然止まったのだ。
「おおカトー老師！それにレレイも。」
「どうして列は止まっている？」
「何でも前の方の荷車の車軸が折れて動けないらしいんですよ。」
と親切な村人が教えてくれた。
すると2つほど前に、緑色の服を来て、謎の杖？を持ち、聞いたことのない言葉を発している人間が走っていた。
「伊丹隊長！村長から、出動要請を貰ってください！」
「他は現場に向かえ！」
「「了解！」」
その連中は何処か規則正しく、どこかの軍隊のようだった。
自衛官達に興味を持ったレレイは、馬車を降り、自衛官を追った。

「こりゃあ酷いな・・・」
「母親はどうだ？・・・」
「無事です。ただ娘さんの方が・・・」
「娘は黒川二曹に頼もう。とりあえず伊丹隊長を待とう。」
車輪が外れ、倒れた馬と荷車。
そしてその前に、ぼろぼろの少女が横たわっていた。
・・・レレイは少女に駆け寄り、軽く状態を見る。
「・・・危険な状態。」
・・・レレイがそう言った時、緑色の服を着た長身の女が座りこみ、脈をはかったりし初めた。
（医術者？）

レレイが周りを見ると、走ってきた三十代位の男が指示を飛ばしている。
するといきなり、馬の悲鳴と、「危ない！」という声がして後ろを向くと、馬がいつの間にか立ち上がり、自分達に向かってこようとしていた。
「伏せろ!!」の声と同時に二十代位の男に頭を押され地面スレスレまで下げられ、そのあと、三回、バン！という炸裂音が響き、馬は血を流して倒れた。
「大丈夫か？怪我は無い？」
「暁～！女の子は大丈夫そうか～？」
「大丈夫そうです！」
言葉はわからないが、レレイは、今一つだけ解った。
この人達は、自分を助けた。ということを。

勇者は王者の炎を受けて

コダ村の住人と、第３偵察隊の逃避行は続いていた。
しかし、半日ほど歩き続け、お年寄りや、子供達の体力は限界。
歩けなくなった人は、高機動車や７３式トラックに乗せていった。
高機動車は、大人が装備込みで１０人は乗れる。が、たちまち車内は子供とお年寄りでいっぱいになってしまった。
そのうえ、道でばったり会ったゴスロリ少女（村人は神官様と呼んでいた）まで乗り込んでくる始末。
しかもハルバートなんていう大きな武器なんて持ち込んだもんだから、もうぎゅうぎゅう詰めになってしまった。
「これ、どこか目的地あるんすか？」
「無い・らしいよ？」
「うへえ、マジすか？」
倉田が嫌な顔をする。
「じゃあ、これ何処へ向かってるんです？」
暁が聞くと、「俺も知らないよ」と、伊丹が疲れた顔で答えた。
「あ、後ろで子供が座り込んじまったな・でももう乗らねえし」
「いいですよ。俺行きます。歩いたってあんまり違わないし。」
暁が重いボディーアーマーと鉄帽を脱ぎ、帽子を被り、小銃を持って外に出た。

「ふう・なあ倉田、」
「なんすかー」
「こっちの太陽ってなんだか日本のより暑くないか？」
そういって窓から身を乗りだし、空を見る。すると太陽の方に、影が見え、だんだん近づいてくる。よく見ると小型のドラゴンだった。
そしてはっきりと見えて来たとき、小型のドラゴンと太陽が何かに隠れた。
竜の悲鳴があがる。

そして、村人からも悲鳴が上がった。
炎竜が、来たのだ。
「?!暁、戻れ！」
伊丹は後ろを向き、無線で呼び掛ける。
『無理です！こっちで何とかします！』ザッ
「わかった！死ぬなよ！倉田、出せ！」

炎竜が吹いた火を、横っ飛びでかわす。
振り替えると、村人や、馬車が燃えて、炭のようになっていた。
村人は混乱して逃げまどい、どんどん焼けて、喰われていった。
暁は舌打ちして、小銃の照星と照門を起こし、炎竜に弾丸をばらまく。
高速で走る車両からも射撃されるが、炎竜の鱗が７．６２ｍｍ弾を拒んだ。
『ＬＡＶ、牽制しろ！キャリバー！』
軽装甲機動車の車上から、笹川陸士長が、炎竜にＭ２で１２．７ｍｍ弾を浴びせる。
『全然きいてないっすよ！』
炎竜の硬い鱗は、重機関銃の１２．７ｍｍ弾をも弾いた。
『構うな！あてつづけろ！』
暁、伊丹、栗林、笹川が、炎竜に弾丸をあびせつづける。
エアガンのＢＢ弾は、当たった所で死ぬわけではない。
だが、当てられ続けるのは嫌なもの。
炎竜は弾丸を鬱陶しそうにして、腕で払い落とそうとする。
だが、それ以上の効果はなく、伊丹は焦りを感じていた。
（くそっ。何か手は！）
すると、いつの間にか、荷台で寝ていたエルフが、自分の目を指して、「ｏｎｏ！ｏｎｏ」と叫んだ。
「■目？そうか！暁！」
『■はい？』

「ドラゴンの目、どうにかなってないか？」

暁視点

無線を受けた暁が、双眼鏡を覗き、炎竜の目を見る。

「矢・・隊長、片目に矢が刺さってます！」

『よし、全員、目を狙え！』

疾走する車両から、弾丸が炎竜の顔目掛けて放たれる。

暁は、手近な荷車の残骸に６４式小銃の二脚を立て、セレクタを単発に切り替え、サイトを覗く。

腕の力を抜き、引き金に指をかけ、反動を配慮して、激しく動く炎竜を覗きこむ。

息を吐き、呼吸を止め、チャンスを伺う。小銃はピクリとも動かない。

そして、ついにサイトが一瞬、炎竜の目を捉えた。

その瞬間、引き金を引く。肩がリコイルで圧され、薬莢が一つ、地面に落ちた。

秒速８００ｍの速度で発射された弾丸は、炎竜の目蓋に傷を入れ、炎竜は叫びながら怯んだ。

炎竜撃退

暁の小銃が放った一発の弾丸は、炎竜に暁を明確な敵だと判断させた。

怯んで目を瞑り、暁が居た場所へでたらめに炎を吐いた。

「うおっ！やっべえ！」

とっさに暁は、小銃を放棄し、焼かれないよう霊力を纏って横にジャンプして回避する。

だが一瞬間に合わず、左足が炎に包まれる。

「?!あっちッ！」

幸い霊力を纏っていたため、あまり重症にならず、防火性がある迷彩戦闘服は、ほんのり焦げ

ただけで済んだ。

その様子を見ていた伊丹が、高機動車から炎竜を撃ちながら、無線を飛ばす。

『暁！無事か？送れ！』

「こちら暁。一応大丈夫です・・・小銃は・・・あーこりゃ駄目ですね・・・送れ。」

放棄した小銃を見ると、木製の銃床とグリップなどがほぼ炭と化し、高熱のあまりマガジンが壊れ、弾は変形していた。銃身も曲がっている。負い紐（スリング）など、もう影も形も残っていなかった。

『解った。一旦そこら辺の岩影に隠れてろ。多分ドラゴンはお前が生きてるなんて思ってねえだろうよ！』

「了解！隊長、俺のことよりドラゴンに集中して下さいよ！」

『わかってるって！終わり！』ザッ

伊丹からの無線が切れると、暁は炎竜に気付かれないよう注意しながら岩影に身を潜め、そっと戦闘の様子を見た。

「全員、目に集中して射撃しろッ！」

伊丹が小銃を連射しながら怒鳴る。

「やってますって！動きが速くて狙いが定まらない！」
と、軽装甲機動車の上で１２．７ｍｍ重機関銃を連射していた笹川士長が言った。
「ちっ！暴れねえで立ってろ！」
伊丹が愚痴を言う。
『ピン抜きよ～し、投げっ！』
すると、無線から暁の声が聞こえていた。

（流石に動きが速くて難しいか・・一瞬でも気を引ければな・・）
暁は周りを見渡し、使えそうな道具を探す。が、有るのは馬車の残骸と炭のみ。
すると暁は、手榴弾を持っていたのを思いだし、取り出した
（出来るだけドラゴンの近くに投げねえとな・この足で行けるか？）
と、先ほど火傷を負った左足を見る。
（ま、やってみるっきゃねえな。外したら不味いな～）
暁は苦笑いをしながら岩影から出て、手榴弾を投擲するモーションに入る。
「ピン抜きよ～し！」
野球のように投げる姿勢に入り、左足を上げ、ピンを抜きながら手榴弾を握った。
「投げっ！」
力を込めて足を降ろし腕を振る。トリオン製の腕がしなり、空気を切り裂き、生身である肩が持っていかれそうな速度で腕を降り下ろす。
手榴弾は回転しながら飛び、炎竜の足元へ落ち、音をたてて破裂した。

突然の爆発音に、炎竜が止まった。
「チャンスだ！よく狙って撃て！」

伊丹、笹川、栗林は照門を覗き、狙いを定め、ふたたび連射する。
止まっていた炎竜の目の近くに弾丸が当たり、炎竜は再び怯む。
「勝本！パンツァーファウスト！」
軽装甲機動車の車上に、笹川と入れ替わって、パンツァーファウスト３（１１０ｍｍ個人携行対戦車弾）を持った勝本が出て、ぶっとい筒先を炎竜に向け、照準を覗き混む。
「おっと。「後方の安全確認。」」
馬鹿、速く撃っちまえ！と、誰もが思った。だが、
「散々訓練したしなぁ」なんて納得もしていた。
それもそのはず。パンツァーファウストは、射撃時の凄まじい反動を押さえる為、後ろに凄まじい勢いでバックブラストを吹き出す。
そのバックブラストの威力は、人の上半身を引きちぎって吹っ飛ばすほどである。
基本即死だ。

勝本が再度パンツァーファウストを構える。が、軽装甲機動車も走行中な為、車が揺れて狙いが定まらない。
「ちっ！揺らすな東！」
「無茶言わないで下さい！」
コンピューター制御じゃないんだから行進間射撃なんて無理だあ！と、東が心の中で叫ぶ。
そして、勝本が引き金を引いた。が、運悪く、ちょうど大きく車体が揺れた時だった。
そのせいで引き金を引く手に力が入り、ガクビキ（引き金を引くときに力が入ってしまい、銃などを揺すってしまうこと。大体当たらない。）してしまった。
「はずれるぞっ！」
すると、後ろ伊丹の後ろから風が吹き込んできた。後ろを振り向くと、後ろのドアが空き、ゴスロリ少女が居なくなっていた。
「うおっ！隊長、上！」
そう言われ、伊丹が窓から顔を出して車の上を見ると、大きいハル

バートを持ったゴスロリ少女が立っていた。
少女は微笑むと、持っていたハルバートを
炎竜へ投げつけた。
投げられたハルバートは、炎竜の足元に突き刺さり、周囲の地面をえぐった。
炎竜はそれによってバランスを崩し、自分から突っ込むような形で、左肩に１１０ｍｍ対戦車弾をもろに喰らった。
よくわからない何とか効果等で、炎竜の左肩は吹き飛び、肩から下が地面へ落ちた。
炎竜が耳をつんざくような悲鳴を上げた。
そして翼を広げると、何処かへ飛び差って行った。
隊員達は、飛び差って行く炎竜の姿を、見送っていた。

避難民の旅立ち

特地での「死」は、それほど遠くない物である。
森で迷ったり、
川に落ちたり、
崖から落ちたり、
馬に突き飛ばされたり。
人は簡単に「死ぬ」。
現代日本に住まう暁や伊丹（まあ自衛官だから危険は高いが）
それに、この話を見ているであろう人だって、「事故死」は身近にある。
特地では、川に落ちるなどの死は、自業自得とされている。
危険な所に行くのが悪い。こういう考え方を持つ人がいるからおかしくは無い。
が、今回の炎竜騒動は、「自然災害」に該当する。
これに自業自得もなにも無い。
人々は犠牲を哀れみ、家族の死、友人の死で悲しんだ。

炎竜を撃退してからしばらく進み、丘へたどり着いた。
すっかり夜になっている。
自衛官達は、エンピ（携帯シャベル。サイズの割に重い）で埋葬用の穴を掘っていった。
そして回収できた遺体を入れ、土をかける。
その後ろで、無事だった避難民が、すすり泣いていた。
自衛官も、憔悴していた。
そんな様子を、暁は、扉が開いた高機動車の後ろに座って見ていた。
先ほどの戦闘で、足に火傷を負ったため、迷彩服の右足の裾が上がり、包帯が巻かれていた。
埋葬が終わり、自衛官達は一列に並び、手を合わせる。
黒川に、「あまり動くな」というお言葉を、背筋が何故か寒くなる、

キレイな笑顔と共に受け取っていた暁は、その場で手を合わせ、目を瞑る。
避難民達も、目を瞑った。

そして、避難民が出発した。
避難民達は、自衛官達に、「ありがとう」と言いながら手を振っていた。
自衛官達は、少し涙目になりながらも、手を振り返した。
この先、避難民達は、親戚の家に行ったり、そのまま町で働いたりしてやっていくらしい。
だが、暁の乗る高機動車には、まだ子供とお年寄りが残っている。
これは、親などを失った者、ケガをした者達である。
彼らには、行き場が無いのだ。
彼らをどうするか。そこで、伊丹は、ものすごい拡大解釈をして解決した。
「同じ炎竜のせいで行き場が無くなったエルフは保護ＯＫだったし、大丈夫でしょう！」
と、笑った。
のこされた人々は、その笑顔で安心したのか、こちらも笑顔になっていた。
暁は、「賛成だけど、どうなってもしらんよ？」という気持ちで、苦笑いしていた。

そして、アルヌスへと帰還したのだが・・・彼らを迎えたのは、蒼然とした表情の幹部自衛官達と、今にもストレスでぶっ倒れそうな伊丹の上司、檜垣三等陸佐であった。
その目線の先には、ストレスの原因である、伊丹が居た。

伊丹率いる第三偵察隊や、他の偵察隊に与えられた任務はこうだ。

「この世界の住人について調査すること」である。
これは、資料や情報だけでなく、こちらの人間と交流、親交を深めるのもそのうちである。
そこで伊丹は思ってしまった。
「あれ？じゃあ自分の意思で付いてきてくれる住民が出来たってことは、この任務大成功じゃね？」
読んでる人の一部も、そうじゃないの？と、思っているかもしれない。
が、役人さんのような考え方だと、これはひっじょ～に不味いことなのだ。
これで、住民があとあと、「拉致」だとか「強制連行」だ、なんて言ったりしたら、
それこそ国際問題だ。
門の向こうでも、日本でも、外国から色々言われるのは間違い無い。
他にもあるが、要するに伊丹がやったことは大問題であり、
そして伊丹のように拡大解釈をする人間は、お役人さんや上司に、凄く嫌われるのだ。
で、大成功だと思っていた伊丹は、いきなり怒鳴られたのであった。
「だっ・・誰が連れてきて良いと言った！」
「あれ？・まずかったですか？」
半笑いの伊丹が頭をポリポリと掻いた。
「まずいに決まっているだろう・・」
「あ～・・どうしましょう？」
「知るかッ・・はあ・・上に報告してくる・・」
部屋から出てきた檜垣と出くわした暁が、敬礼をする。
檜垣は、右手を軽く上げて応じた。
ここまでくると、檜垣が可哀想に思えてくる暁なのであった。

「と言うわけで、陸将の許可が出た。人道的な配慮として、避難民受け入れを許可する。」

「ただし。」
「ただし？」
「君が面倒をみろ。必要な書類、物資なども、お前が管理するんだ。」
「ええ～・・」
伊丹が嫌そうなな顔をすると、檜垣も流石におこりだし、
「ええ～じゃ無いッ！お前が連れてきたんだろう！お前が面倒を見ろっ！」
「はっ、はいっ！」
驚いた伊丹の背筋が伸びる。
「わかったら・・さっさと行けッ！」
檜垣は、書類の束を伊丹に押し付け、顔を抱えた。

イタリカへ

避難民受け入れから二週間程が経過した。
ある日、いつもどーり書類を作らされていた伊丹の所に、避難民のレレイという女の子が訪ねて来た。
もちろん特地の言葉のため辞書を見ながら翻訳したところ、「翼竜の死骸から鱗を取って売りたい」ということらしかった。
一応、伊丹が上官に訪ねると、「何でそんなもん欲しいんだ？まあ欲しいってんならいいが」というお言葉を頂いた。
伊丹がその事をレレイに伝えると、ぎこちない日本語で「ありがとう」と返してくれた。
そして3日後、伊丹達は、翼竜の鱗を売る避難民を、街へ送ることになった。

「あ～あ。暇ですね～」
「そうだねぇ～」
やる気の無さそうな声で暁と伊丹が話していたら
「任務中ですよ」
と即座に黒川に釘を刺された。
「まあいいじゃないすか。俺らが暇なのは平和の証っすよ？」
「一応戦争してるんだけどな」
と、暁が苦笑した。
倉田の言う通り、ここ二週間は平和だった。
大規模な戦闘は、こちら側にきた後の４回しか無く、
６つの偵察隊の中で武器を使ったのは、炎龍と闘った伊丹達のみであった。
「あれ？そういえば暁さん、小銃壊してたけど、武器科の人に何か言われました？」
「ああ、「もう少し大事に扱えよ・・・」ってため息つかれた」
「はは、よかったっすね～尉官の人に怒鳴られないで！」

「まあな。多分次壊したら呼び出されんだろ」
暁と倉田は笑った。
「全く。お前ら任務中だぞ？」
おやっさんの言葉で背筋がのび、顔がこわばった。
「倉田、つぎの分かれ道を左に行ってくれ。しばらく行ったら街が見えてくるはずだ。」
おやっさんが、コンパスと地図を照らし合わせながら倉田に指示を出した。
「了解。」
すると、レレイがコンパスに興味を示し、コンパスをじーっと見ている。
「これか？これはコンパスと言ってな？」
とコンパスのことを説明し始めた。
「鬼軍曹と言われたおやっさんが、女の子相手に相貌を崩しちゃってまあ」
「お孫さんを思い出したんじゃない？」
伊丹達は、少しほのぼのとした雰囲気で進んでいた。
「おっ、街、見えました！」
「おっ、やっとか！」
伊丹が双眼鏡を覗いた。
「おおっ！すげえ！城塞都市だ！でかい壁だなぁ！」
伊丹はオタク心をくすぐられ、とても嬉しそうだ。
「あーあ、伊丹二尉だけずるいっすよ！」
「うるせ！しっかり　運転しろ！」
と、伊丹が倉田の鉄帽を軽く叩いた。
暁も双眼鏡を取りだし、街を覗いた。すると、ついこの前も見た物が見え、ため息をついた。
「伊丹二尉。まーた黒煙です。」
「うげっ！またドラゴンじゃないだろうな！」
「あれは▪▪あ、人間同士で戦った後ですね。武装した集団が離れて行きます。」▪

「どの辺だ！」
伊丹も双眼鏡を覗く
「１１時の方向！距離３０００！規模数百ってとこです！」
「了解！おやっさん、各車両に伝達。戦闘に備えろ！」

盗賊退治

イタリカは、緊張に包まれていた。
襲ってきた大規模な盗賊を、多くの犠牲を出しながら撃退したと思ったら、
見たこともない荷車のような物が壁の門の前に現れたのだ。
壁の上の人間達が、弓や固定した大きなボウガンを荷車に向ける。
そしてしばらくの沈黙を、騎士の一声が破った。
「何者だ！敵では無いなら姿を見せろ!!」

「うわーおっかねえ。なーんか嫌な雰囲だなぁ」
と、伊丹がぼやく。
「伊丹さん、壁の上に鍋あるんですけど・・・しかも熱湯とか入ってそうです・・」
窓の外を双眼鏡で覗いていた暁がいうと、おやっさんや倉田が双眼鏡を覗いた。
「あっついのかけられるのは勘弁ですね。大火傷はナイフの傷なんかよりよっぽどキツいてすし。」
「おやっさん、怖いことといわないでよ～・・・あーあ、何で俺たちこんな目に・・もう帰ろうよ。」
「もう少し頑張って下さい隊長。・・・ってあれ？騎士が出てきましたよ？」
倉田が双眼鏡から目を放していう。
『何者だ！敵では無いなら姿を見せろ！』
「だってよ。暁。」
「こういうのは隊長がやるべきでは？」
「何いってんだよ。隊長が危ない目に合いそうなんだぞ？部下として、「自分が行きます！」とか言うもんじゃねーの？」
なんて言い合っていると、伊丹の肩を、銀髪の女の子がつついた。
「ん？なんだ？」

伊丹が尋ねると、銀髪の女の子は片言の日本語で、「私たち、行く。待ってて。」
と言って、車両の後ろのドアを開けて出ていってしまった。
黒ゴスロリの神官様と金髪エルフも続いて出ていった。
「隊長」
「わかったよ。行くよ。暁、頼むから着いてきてくんね？」
「良いですよ。ってか、最初っから命令すりゃ良いのに。」
「あんま命令って慣れてないんだよ。」
伊丹は、銃剣と拳銃を桑原曹長に預け、外に出た。
暁もその後を追い、小銃を抱えて外に出て、伊丹達を追った。

「姫様、あの者らをいかがいたしますか？」
「うーん」
このイタリカで、ひょんな事から盗賊撃退の為に民兵達の指揮をしていた帝国の皇女、
ピニャ・コ・ラーダは決断を下せずにいた。
盗賊を撃退し、やっと一息つけるとおもったら、謎の荷車三台が現れたのだ。
しかも一台は鉄で出来ているように見え、ボウガンのような物も付いている。
そして一番の問題は、騎士の呼びかけで出てきた人間達だ。
一人はくすんだオーク材の杖を持っている所を見ると、リンドン派の魔導師だろう。
もう一人は金髪碧眼に笹型の耳。妖精種のエルフだ。
そしてもう一人が問題だ。
黒い神官服に巨大なハルバートを軽々と持っている人物。
死神ロウリィだ。
彼女を相手に等出来るハズが無い。
だからといって城門を開け、迎え入れるのも危険だ。
彼女らが盗賊の仲間で無いという確信は無いのだ。

死神ロウリィが盗賊の仲間とは考えたくは無いが。
後から出てきた緑色の衣服やら兜のような物を被った二人は置いておくとして、大変難しい選択である。
「姫様」
「姫様」
周りでは彼女の決断を待つ者達が不安そうな顔で彼女を見ていた。
そして、城門の横にある通用口の扉がノックされた。
「ええい！迷っていても仕方がないッ！」
そういってピニャは、通用口の閂（かんぬき）を抜くと、扉を勢い良く開けた。
その時、彼女は緊張のあまり、扉を開ける際の変な感触とうめき声に気づかなかった。

「あーあ、きちゃったよ～…」
と、伊丹がため息をつく。
「ここまで来たら頑張りましょう？」
「わかってるよ…」
伊丹は城門の横にあった扉をノックした。
「…あれ？反応ナシ？」
「何か話こんでるんですかね…あ、違った」
扉の向こう側で閂を抜く音が聞こえた。
「ふう。やあっとはいれッ！」
扉がいきなり勢い良く開くと、ドゴッと、鈍い音が響き、扉の前に居た伊丹の額に激突して、
伊丹が倒れた。
「隊長…くっそ！」
暁は、開いた扉の前で突っ立っていた女へ急激に距離を詰め、本人が何をされたか理解出来ないようなスピードで、女の背後に移動し、女の右腕を押さえつけ、着剣していなかった銃剣を喉元に向け、周囲を睨む。

拘束された女は、やっと状況を理解したようで、顔を青ざめさせた。
周囲に沈黙と緊張が走り、辺りが急に静かになる。
すると、一人の騎士が暁に近づいてくる。
「すまないが、姫様を離して頂けませんかな？先ほどの行為は故意ではありません。」
と言った。
暁が後ろにいたレレイの方を向くと、レレイは無表情で、「離して欲しいと言っている。わざとでは無い。」と言った。
「▪わかった。」暁は女を拘束したまま下がり、小銃を拾うと、女を解放し、瞬時に着剣し、
セレクタを連射に切り替えた。

「先ほどは、すまなかった。額の傷は大丈夫だろうか？」
「あ、大丈夫です。ご心配無く。」
ピニャの心配の言葉に、伊丹が半笑いで応じた。
「で、今の町の状況を教えて頂けますか？」
「わかった。」
暁の言葉に、ピニャが応じ、説明を始めた。
「このイタリカは、数日前から大規模な盗賊の集団の攻撃を受けている。妾は任務中に偶然この町に立ち寄っていて、この町の民兵達の指揮をとることになった。」
「戦闘の回数は？」
「妾が到着する前は、５人程で壁の外をうろうろしていたらしい。大規模な戦闘はさっきのが初めてだ。」
「敵の規模は？」
「およそだが、数百だろう。他に隠れているのがいるかもしれんが。」
「戦闘での人的被害は？」
「今集計している所だ。」
「わかりました。ありがとうございます。」
伊丹はお礼を言うと、「暁、ちょっと▪」と手招きして、席を立った。

（何ですか？）
（どうしようか）
（決めるのは隊長でしょう？）
（いや分かってるけどさあ）
（▪まあ、ここで見て見ぬフリってのは癪ですし、いいんじゃないですか▪？）
（まあ、そうだよな）
（上もＯＫ出すんじゃないですか？手助けして、それを通して交流が出来るようになれば文句ナシでしょ。）
（わかった。やろう。）
　伊丹はソファーに座ると、真剣な顔になり、
「ピニャ殿下、私達も、盗賊退治のお手伝いをさせて頂きたいのですが。」
「ああ、それはかまわない▪のだが。」
「ありがとうございます。▪で、えっと、僕らちょっと色々面倒な事情がありまして、代表者から▪要請が無いと武力行使等々が出来ないので、▪お願いして良いでしょうか？」
「▪わかった。盗賊の撃退に協力して欲しい。」
　▪それを聞いた伊丹はぴしっと立ち上がり、その横に暁が並んだ
「了解しました！総員全力で任に当たります！」
　そういうと、二人同時に敬礼をした。

トリガー、起動。

「東、ＭＩＮＩＭＩ（軽機関銃）、ここ。」
「倉田、街の人達に、灯りは要らないって言っといて。」
伊丹が壁の上で指示を飛ばし、隊員達はもくもくと作業をしていた。
「隊長、Ｖ８。」
「おっ、サンキューな。」
伊丹が栗林からＶ８（個人用単眼暗視装置）
「あまり深くは無いですが、もうすぐ、門の前の穴が掘り終わります。今から、装備や人員の配置を確認します。」
「わかった。ありがとう。・・さて、さっさと仕上げちゃいましょう！」
「「「了解！」」」
隊員達は再び持ち場へ散っていき、
・伊丹と暁のみが残った。
「・・にしても隊長、こちらの門の配置って・・」
「・ああ。この門を守るのは俺達１３人だけ。・多分こっちは囮で、本命は待ち伏せしてる奥の連中だろうな。」
「大人数で向こうの門を、守りが固いというふうに見せ、ほとんど手薄の俺達に敵を誘導する。・俺達が戦闘に突入したら、待ち伏せの位置について、一気に殲滅する。・・ってとこですよね。」
「多分そんなとこでしょ。・わざわざこっちの門から待ち伏せ地点までの・一本道から迂回されないように、路地とか塞いでたもん。」
「・・敵さん、引っ掛かりますかねえ？」
「・わからんないよ。あのお姫様、前回の戦闘も似たようなことやったみたいだし。」
「なーんか嫌な予感しますよ俺。」
「俺も。」

８時間程が経過すると、街の奥から叫び声が小さく聞こえた。

「もう!こっちに来るんじゃ無かったわけぇ?」
　黒ゴス神官のロウリィがそう嘆く。
「マルサンヒトヒト。夜襲にはベストな時間帯ですね〜」
「いろんな国の敗残兵も混じってるって話だからな。そう言った物は熟知してるハズだ。」
　おやっさんがそう言いながら、双眼鏡を覗き、他の隊員もそれに続いた。
「あーあーあー、やっぱり敵さん引っ掛からなかったよ。」
「まあ今さらそんなこと言ってもしょうがないでしょ。倉田、あっちから救援の要請は?」
「まだ、何も。」
「来ないと下手に動けないしな〜。第四戦闘団の到着は?」
「…あと約30分程かと。」
「う〜ん。…しょうがない。ひとまず全員待機。仁科、勝本、暁は歩哨を。もしも向こうから敵が流れてきたら、連絡してから出来るだけ足止めしろ!キツそうだったら隠れてやり過ごせ!倉田、黒川は車両とレレイ、テュカを守れ。他は持ち場について周囲を警戒!いいか、一人も死ぬんじゃないぞ!」
「「「了解!」」」

「あっ…んんっ…くふぅッ…!」
　黒いゴスロリに似た神官服を纏った亜神、ロゥリィは快感に悶えていた。
　街の反対側で起きている戦闘。それによる死者は、ロゥリィの体を通して神、エムロイへと召される。
　戦死者の魂がロウリィの体へ入ってくる度に、鋭い快感がロウリィを襲った。
「んぁっ!あんっ…んんっ…」
　苦しそうに悶えながらも耐え続けるロゥリィ。
　その姿は、幼くも、色気を感じさせた。
「やっべ、勃っちまった。」

「言うな。俺もだ。」
・何処からかひそひそとそんな会話が聞こえ、栗林は、女として思う所もあるらしく、
「・・まずくないですか？」
・・と伊丹に切り出した。
「うーん、そう言われても。・・何かわからないか？」
・伊丹に問いかけられたレレイは「戦いに身を任せれば収まると言われている。でも、詳しいことはわからない。」といった。
その瞬間。
我慢の限界が来たロウリィが、ハルバートを手に立ち上がり、壁から飛び降り、ものすごいスピードで走りジャンプし、建物の屋根を駆けていった。
「やっべ！暁！」
伊丹は無線機のプレストークスイッチを押し込み、暁に通信した。

『暁！』
「なんですか？隊長。」
『建物の屋根をロウリィが走って居なかったか？』
「建物の上？」
暁は建物を見上げる。すると丁度、黒い風の如く屋根の上を走る、ロウリィが居た。
「今丁度居ます。」
『わかった！ロウリィを追いかけてくれ！ロウリィは多分戦場に向かってる！女の子一人じゃ心配だ！先行していてくれ！俺らもじき着く！』
「了解！」
・暁は小銃を抱え、走る。が、
「・って速っ！」
・装備を着ているとはいえ、元第一空挺団の暁である。装備を着込んでいても、結構足は速い。

それなのに、暁の全部の装備の何倍も重そうなハルバートを持っているロウリィは、ありえない程速かった。
「・・見失うわけにゃいかねえし、しょうがねえ。」
・暁はポケットから黒いグリップの様な棒状の物を取りだし、左手で握る。
「トリガー、起動。」

無双タイム

『トリガー、起動開始。』
機械的な音声がそう告げると、暁の体が淡い光に包まれる。
『起動者、実体スキャン。』
『戦闘体、生成。』
『実体を、戦闘体に換装。』
『トリオン機関、接続。』
『接続強制解除まで、残り３００秒。トリガー起動完了。』
トリガーが起動し淡い光が消えると、三型迷彩服の上下を着て、白い刀のような物を下げた暁が居た。
「グラスホッパー。」
暁がそう言うと、暁の前に光る板のような物が生成される。
暁がそれを踏むと、大きくジャンプして屋根に乗り移り、ロゥリィを追った。

暁がトリガーを起動したときには、ロゥリィは既に門の前に居た。
その場にいた人間全てが、動きを止め、いきなり屋根から飛び降りてきた黒い神官服を着た少女を驚いた表情で見ていた。
そして最初に動いたのは、一人の盗賊だった。
手に握った戦斧をロゥリィ目掛けて降り下ろす。が、ロゥリィには当たらなかった。
回転するように、紙一重の所で戦斧の一撃をかわしたロゥリィは、回転の勢いでハルバートを盗賊の腕に叩き込んだ。
その衝撃で、男は真っ二つになりながら吹き飛び、別の盗賊に直撃した。
目の前で起きた仲間の死。
それは、盗賊達の頭を、再び戦闘へと引きずり戻した。
狂気、憤怒、喜び。
様々な感情が混じりあい、

殺意や欲望を掻き立てる。
殺せ。奪え。犯せ。壊せ。狂え！
盗賊達は、見えない何かに突き動かされるように動きだし、武器を持ってロゥリィ目掛けて突っ込んで言った。
この時。盗賊達は誰も気付いていなかった。
普通の人間ならば、絶望的な状況。
それなのに、彼女は笑っていた。
「さあ。かかってきなさぁい。全員切り刻んであげるわぁ!!」
ハルバートを持った黒い亜神は、喜色をはらんだ声でそう言うと、ハルバートを構え、盗賊の集団に突っ込んで行った。
「まだ！まだ足りないわぁ！もっと、私を満足させてみなさぁい!!」
ロゥリィは、ダンスを踊っているかのように、華麗に攻撃をかわし、ハルバートを叩きつけた。
切りつけ、突き刺し、凪ぎ払う。
いつの間にか、ロゥリィの周りには、死体が広がっていた。
「うっ、うおおおおおおお!!!」
乱戦の中、大男が、大きなハンマーを構えて、ロゥリィを潰そうと迫る。
が、そのハンマーが叩きつけられる事は無かった。
何かが飛び付いてきた感覚。そしてその直後に、焼けた鉄でも押し付けられたような痛みが首を襲い、大男の意識は途切れた。

「おーおー、やってるやってる。」
暁は屋根の上を走りながら、「スコーピオン。」と言った。
すると暁の左手に、光る小さなナイフが現れた。そしその直後、屋根が途切れ、暁の視界に戦場が映る。
暁はその一瞬で周囲の状況を把握し、ロゥリィにハンマーを降り下ろそうとする大男に狙いを定め、屋根から飛び降り、大男の背中に飛び付く。
「じゃあな。」

暁はそう呟くと、右手で男の頭を押さえ、左手に逆手で持ったスコーピオンを、大男の首筋に突き立てた。
肉をかっ切る感覚と、動脈を貫いた感触が暁の手のひらを走る。
そしてスコーピオンを一気に押し出し、喉を切り裂いた。
大男は首から血を吹き出しながら、ハンマーを落とし、膝から崩れ落ちた。
暁は地面に降り、近くに居た盗賊を伸ばしたスコーピオンで切り裂き、突き殺した。
「あらぁ？追い付いてきたのぉ？」
「ああ。こっちも護衛対象をほっとく訳にはいかないからな。ま、その調子なら大丈夫そうだな。」
「わたしぃを誰だとおもっているのぉ？」
ロゥリィが狂気を孕んだ笑顔で言う。
「死神さま。だろ？」
暁がそう言った瞬間、再び機械的な音声が鳴った。
『接続維持限界。戦闘体活動限界。トリガー、強制切断。』
暁の体が再び光り、換装前の四型迷彩服にテッパチ、防弾チョッキを着込み、小銃を持った暁に戻った。
「ロゥリィ！俺は門の外を殲滅する。門の内側は任せる！」
「わかったわぁ！」
ロゥリィの了承を得ると、「着け剣！」と自ら号令をかけ、６４式小銃に銃剣を着剣する。
セレクタを連射に切り替え、門に向かって走りながら、腰だめで連射する。門を塞いでいた盗賊達は、７．６２ｍｍ弾に体を貫かれ、何が起きたか理解する前に意識を失い、死んでいった。
空になった弾倉を交換し、空の弾倉を前にいた盗賊の鼻っ面に投げつける。
金属製の弾倉を顔面に喰らった盗賊は、衝撃で昏倒し、倒れる。
暁は、装填した弾丸をばらまき、門の外への道をこじ開け、門から出た。追いかけて来た盗賊
を銃剣で胸を突くと、発砲して、トドメをさしつつその衝撃で銃剣

を引き抜き、後ろに回り込んでいた盗賊の顔に銃床を叩きつけ、鼻を折る。
「盾を前へ！敵を囲め！」
壁の上に居た指揮官らしき人物の指示が飛び、盾を持った盗賊達が暁を囲む。
暁はレッグホルスターから９ｍｍ拳銃を抜くと、９ｍｍパラベラム弾を容赦なく浴びせ、
盾ごと体をを弾丸で貫かれた盗賊は次々倒れて行った。
暁は盾を捨て、剣を片手に突っ込んできた盗賊を前蹴りで吹っ飛ばすと、小銃のサイトを覗き、壁の上で盗賊に指示を出していた男の頭目掛けて銃撃した。放たれた弾丸は指揮官の眉間を貫き、血を撒き散らした。
「こちら３ｒｅｃ（第三偵察隊）、暁。壁上の敵指揮官αを射殺。増援はまだか。送れ。」
暁が無線機のプレストークスイッチを押し込み、問いかける。
『第四戦闘団より３ｒｅｃへ。現在目的地を中心とした不自然な乱気流により、上空で待機中。送れ。』
「こちら３ｒｅｃ。こちらがわの魔法のような物の可能性が濃厚。術者らしき人物を今確認した。こちらで対処する。乱気流が消え次第、突入してくれ。終わり。」
『了解。終わり。』
「▪さあて。さっさと片付けちまうか。」
▪暁は弾倉を交換しながらそう言うと、術者らしき女の子の方に走り出した。

巨大な閃光（ヒュージスパーク）

「ちっ、誰かアイツを止めろ！」
「ミューティーに近づけさせるな！」
ミューティーと言うらしい、魔法を使う女の子を無力化するために、暁は、壁の外を走っていた。
暁を止めようと盗賊が立ちはだかるが、暁は止まらず、盗賊達は弾丸に体を貫かれて倒れていく。
「くそ！ミューティーには指一本触れさせねえ！」
と少しカッコつけた盗賊が、剣を片手に暁に突撃する。が、
「邪魔だよおらっ！」
無慈悲にも、暁が放った前蹴りによって股間を半長靴で蹴り飛ばされた盗賊は、股間を押さえて気絶した。
「さて！と。」
「ひっ……」
あっという間に盗賊を蹴散らした暁を見て、術者の女の子は後ずさる。
そして後ろに向かって逃げようとするが、暁に手を捕まれて、逃げることは叶わなかった。
「えっと……あなたが、風の魔法の、術者ですか？」
暁が特地語で問いかける。
「……そ、そうよ。」
と、女の子は涙目で暁を睨みながら答えた。
「分かった。」
そう言って暁は、自分の霊力を、掴んだ術者の女の子の手から流しこんだ。
すると、女の子が発生させていた気流が消えた。
暁が、女の子の魔法を、流しこんだ霊力を使って内側から「相殺」したのだ。
暁の能力は、「相殺する程度の能力」。
どこぞの幻想殺しのように、自らの霊力、トリオン等のエネルギー

に触れた、魔法等を、打ち消すことができるのだ。
　そして暁は今回、女の子が魔法を使えないようにするため、一定時間の間、体内に流しこんだ霊力で、魔法を相殺し続けるようにしたのだ。
「さて。これで無力化完了だな。」
　暁は、そこら辺の地面に落ちていた、壁を登るために使ったと思われるロープを銃剣で切り、
　女の子の両手を後ろ手に縛り、担ぎ上げた。
　そして周りに視線を戻すと、いつの間にか、大量の盗賊に囲まれていた。
　そして、いかにも、というような風貌の男が歩み寄ってきた。
「一人でここまで入り込んでくるとは。命知らずな男だ。・・だが、私は、お前が気に入った。」
「・何が言いたいのですか？」
　暁は敬語で返した。
「俺の部下になれ。中々の人数を蹴散らしたその力、そして度胸。俺はお前を殺すのがもったいなくなってきた。・・命が助かるのだ。答えはもはや聞くまでもないが。」
　超上から目線の男に、暁は笑って言った。
「ええ。たしかに答えは言うまでもありません。俺は、あなた方の仲間にはなりません。」
　・そういうと、男の表情が曇った。
「・何だと・気に入ったとは言ったが、そこまで行くと勘に触る。もう一度聞くぞ。俺の部下にならないのか？」
「ええ。何度聞いても答えは同じです。あなたのような雑魚の下につくなんて、ゴメンですよ。それに、俺は今の仕事に誇りを持っています。」
「・つくづく命知らずな男だ。状況が解っていないのか？」
「いいえ？俺はしっかり理解していますよ？ですが、自分はこの状況を、・別に命の危機だと思っておりません。」
「・」

「あなたが俺の立場だったら、危機かも知れない。だけども、俺にとってはこれっぽっちも危ない要素が無いんですよ。」
「大した自信だな。たしかにお前は強く、そしてお前の武器は強力だ。だが見たところ、その武器は、筒先を向けた相手しか射倒すことが出来ないと見える。この人数に囲まれている今、勝てる要素が無いだろう。」
「…そっちも大した自信だな。もしかしてこの程度で俺を殺れるとでも…舐められたもんだな。」
暁はそういうと、自分の首に手を当て、「斬ってみろよ」と言う。
「面白い。」
そう言うと男は、巨大な大剣を、暁の首目掛けて振った。
剣はかなりの速度で真っ直ぐに暁の首に近づく。
(捉えた!)
男はニヤリと笑みをこぼし、周りの人間も、暁の首が飛ぶのを確信した。
そして、
ガギイィィン!!と、いう音と共に、
大剣が弾かれた。
「なっ…」
全員が驚愕の表情で暁を見る。確かに、首に直撃したはずだったのだ。
しかし、目の前の暁は、首が飛ぶどころか、傷ひとつついていなかった。
暁は、傷つく事もなく、その場から動く事も、弾かれる事もなく、受け止めたのだ。
「じゃあ、こっちの番だな。」
暁はそう言って、呆然として動かない男の腹に軽く掌底を押し付ける。
「なっ、何を」
そして暁が少し手のひらに力を込めると、鈍い音と共に、男の腹に大穴が穿たれた。

男は悲鳴を上げる事も驚くことも出来ずに絶命する。
「さて。次はお前らだ。」
暁はそう言いながらカードのような物を取り出しながら、自分を取り囲む盗賊達に向き直り、カードを持った手を、盗賊達に向ける。
「スペル宣言。霊砲「ヒュージスパーク」。」
そう暁が宣言すると、カードが消え、盗賊達に向けた手のひらに、圧縮された霊力が集まり、
次の瞬間、圧縮された霊力が解放され、巨大なレーザーとなって放たれた。
「うっ、うわあああああ!!!」
「腕がっ!うでがあああああ!!」
レーザーに当たった盗賊は塵ものこさず消し飛び、体の一部が当たった盗賊達は、当たった腕などが消し飛んだ。
そしてレーザーで空いた盗賊達の隙間を、暁は走り抜け、女の子を抱えたまま門へと向かった。

地獄の黙示録（改訂版）

『第四戦闘団より３ｒｅｃ。乱気流消滅。これより壁外の盗賊の排除を開始する。協力感謝する。』

「・・マジか！」

・・暁が走りながら後ろを向くと、小さくヘリの姿があった。

ヘリとはいえ、戦闘用であるヘリのスピードはかなり速い。おそらくすぐに追い付かれるため、暁は急いで壁内へ退避した。

すると、伊丹、栗林、富田が到着しており、戦闘を開始していた。

暁は、伊丹達の邪魔にならないよう、射線に注意して合流した。

「隊長、状況は？」

「見ての通りだ。門の外はヘリ隊が、門の中は俺らが守る。栗林とロゥリィの援護と、抜けてきた盗賊の殲滅だ。」

「了解！」

暁は６４式小銃の二脚（バイポッド）を立て、伏せ撃ちの体制になると、セレクタを単発に切り替え、射撃を開始した。

盗賊達は、まるで嵐のようなロゥリィと栗林の前に倒れ、そして運良く抜けられた盗賊は、伊丹、暁、富田による正確な射撃で仕留められていった。

「マグチェン！」（弾倉交換）

暁が弾を撃ちつくし、空の弾倉を地面に落とし、新しい弾倉を出そうと弾納に触れる。が、もうすべての弾倉を使いきっていた。

「ちっ、隊長、弾倉下さい！」

「あいよっ！」

伊丹が暁に弾倉を放り投げた。

そして目の前で戦闘をしていた栗林も弾倉が空になる。

「ちっ、隊長、銃！」

「お前ら俺を何だと思ってるんだ！」

と言いながら小銃を栗林に放り投げる。

すると、斬撃を受け、ハンドガードが派手に凹み、二脚が折れた、栗林の小銃が帰ってくる。

「貰った！」
栗林のそのスキをついた盗賊が、数人抜けてくる。
「っ！富田、暁、撃つな！」
暁と富田が慌てて銃を向けると、伊丹から指事が飛ぶ。そう。盗賊達の後ろには街の住人が居たのだ。今撃てば、市民に当たる可能性がある。
「暁！」
「わーってますよっ！」
暁は、小銃のバレルを握ると、フルスイングで、銃床で盗賊を殴り付けた。そしてそのまま右足の回し蹴りで二人目の股関を蹴り飛ばすと、三人目に、硬～いテッパチ（ヘルメット）でヘッドバッドを決め、剣を構えて突っ込んできた最後の一人を投げ飛ばした。
ふうっ、と暁が息をつくと、伊丹が、「やったな暁、説教確定」と、言ってきた。
暁が慌てて小銃を見ると、バレルが曲がり、銃の排莢部が凹んでいた。
暁は伊丹の隣で小銃を二脚で保持すると拳銃を抜き、盗賊に９ｍｍパラベラム弾を浴びせた。

一方その頃、壁の外にも、地獄が広がっていた。
乱気流が消えて、飛来してきたヘリコプターは、盗賊を無慈悲に銃撃し、手榴弾を落として行った。
ヘリコプターの大群が、ワーグナーを大音量で鳴り響かせ、逃げ惑う盗賊を銃撃し、盗賊の集団に有線誘導式対戦車ロケット弾を叩き込み、ミサイルに狙われている訳でも無いのに、フレアを撒き散らした。
『ハンター1より団長へ。イタリカ上空に、我への脅威無し！送れ！』
「了解！ハンター全機、イタリカ上空へ突入！機銃での攻撃にて残存する敵勢力を殲滅せよ！住人、３偵に当てるなよ！」
『ハンター1、了解。ハンター全機、我に続け！３ｒｅｃに警告を！』

暁達が戦闘を続けていると、上空に、コブラ（対戦車戦闘ヘリコプター）３機が飛来した。
『３ｒｅｃ！こちらハンター１！これより、カウント１０で、門内を掃討する！至急退避されたし！繰り返す！至急退避されたし！』
伊丹、暁、富田は慌てて、伊丹はロウリィ、富田は栗林、暁は小銃や弾倉と、魔法を使っていた女の子を抱え、冊の近くまで下がる。
『１０！９！８！７！６！５！４！』
カウントが始まり、暁達は、耳を塞ぐ。
『３！フタ！ヒト！全機攻撃初めッ！』
コブラ隊の隊長機（ハンター１）の号令で、滞空していた３機の機銃が回転しながら火を吹いた。
ものすごい速度で２０ｍｍの弾丸が放たれ、巻き込まれた盗賊が形が分からない程にズタズタにされていた。
周囲に、立っている盗賊が居なくなると、『撃ち方やめッ！』と号令が入り、機銃が停止した。
その時、上空を滞空するヘリと、地上の自衛官を、ピニャや、その部下ハミルトンは、恐怖や喜び等が混じりあった、複雑な表情で見ていた。

その後、すぐさま多目的ヘリから懸垂降下（ヘリボーン）してきた隊員達によって、遺体や瓦礫は運びだされ、捕虜を集める等が行われ、戦闘は完全に終了した。
第四戦闘団は作業や、公約を結ぶ等が終わるとすぐに撤収し、そして、第３偵察隊の隊員や三人娘達も、本来の目的である商談を終え、イタリカへの帰路に着いた。

「いやー、終わりましたね～、」
「あー。うん。ねみいよ倉田…」
…

伊丹はふぁ～と大きなあくびをする。
「そーっすね。最近まともに寝れて無いし。速く隊舎帰ってベッドで寝たいですよ。」
暁が伸びをしながら言うと、黒川が、「でも、暁さんはお説教があるんではないですか？」と言い、暁が苦い顔をした。
「あとくりぼーもな。」
「久米二尉は女に優しいからなぁ・・・あーあ、俺初めて女になりたいと思いました・・」
暁が項垂れると、車内は笑いに包まれる。
「あれ？厳しいのは久米二尉でしたっけ？」
「ああ。羽原一尉は優しいぞ。俺あの一尉に説教されたことほぼ無いもん。」
・と暁が言うと、伊丹が首を傾げる。
「・あれ？ってことはお前、銃壊したの初めてじゃないの？」
・暁は苦笑いをしながら、
「ドラゴンの時も壊しましたし、空挺の時空挺降下で銃床折ったり、一普連でハンドガード割れたりしました。まあ銃の寿命もあったんすけど。」
「・お前なあ」
「いや、でも一普連でハンドガード壊してからは超丁寧に使ってました！整備も丁寧に！」
「「「それが普通だ（ですよ）」」」
「まーったく。武器科さん方も大変だねえ。」
・伊丹が苦笑する。
「・あれ？」
「どうした？倉田。」
「・前方に、煙が見えます。」

囚われの伊丹

倉田が立ち上る煙を発見してから、少し経った。
煙の正体は騎馬の集団であることと、こちらに向かってくるということが解った第三偵察隊の面々は、小銃を手に、もしもの事に備えた。
「隊長、どうしますか？無理やり道を外れて避けて進む事もできますが。」
「いや、それはかえって危ない。逃げたら逆に怪しまれる。・・それに、あれが姫様が言ってた、騎士団かもしれない。それなら、条約があるから手は出してこないハズだ。」
「了解。」
「あ、でも一応準備はしといて。」
「わかりました。総員、敵対行動、及びそれを連想させる行動は控えろ！」
『ＬＡＶ了解』
『小トラ了解。』
すべての車両からの返事が来ると、暁が双眼鏡を覗いていた。
「接触まで、およそ２分！」

近づいてきた騎馬隊は、伊丹のいう通り、ピニャが言っていた騎士団だった。
黄色と白のバラが描かれた軍旗らしき物を掲げる集団は、ほとんどが、女や老人で構成されていた。
そして、停車した３偵の先頭を走っていた、７３式小型トラックの運転席に近づいてきた。
「貴様ら、何者だ！」
特地語がまだあまり出来ない富田は、赤本のページをめくりながら、カタコトでなんとか返した。
その様子を見て、言葉があまり解らないことを察したのか、白い髪の女性が、富田に、ゆっくり、カタコトで話しかける。その間に、反

対側のドアから、ゆっくりと、小銃を構えた隊員が出てきて、いつでも対処できるよう、車両の陰で身を潜めていた。
暁は、高機動車から降りると、道のすぐ横の草むらを歩伏全身で進み、先頭の指揮官らしき女性が見える位置で二脚を立て、伏せ撃ちの体勢で構える。
「お前達、何処から来て、何処へ行く？」
白髪の女性にそう言われると、富田は、
「イタリカから、帰る」
と返す。
「イタリカから？何処へ？」
「ええっと、・・アルヌス・ウルゥ。」
「!!アルヌスの丘だとっ?!」
驚いた顔になった女性騎士は、「降伏なさい！」と、富田に剣を向ける。
すると、高機動車から伊丹が出てきた。
無駄に警戒されないため、武器や装備は外している。
「あー、失礼。部下が何かいたしましたかね？」
と、流暢な特地語で伊丹が言うと、ヘラヘラした態度が勘に触ったのか、金髪縦ロールの騎士が、「お黙りなさい！」と言い、強烈なビンタを伊丹に放った。それをみた隊員達は、小銃の安全装置を解除し、射撃体勢にはいり、ＬＡＶの上では、笹川が、ブローニング重機関銃のコッキングレバーを引き、チャンバーに初弾を装填した。
それを桑原が無線で止めると、
「逃げろ！いいから逃げるんだ！」
と伊丹が叫び、外の隊員達が車両に戻っていき、車が発車する。
暁は、無線で桑原に、残るという事を伝えると、後ろにあった荷馬車の荷台に転がり込んだ。
伊丹は手を縛られ、先頭につれていかれた。
騎馬隊が動きだし、ゆっくりとイタリカへとむかっていった。

騎士の到着

▪〜イタリカ〜

「▪はあ。誰か替わってくんねーかなー」

▪と、門の見張りの民兵が呟く。

「んなことといってもよ、もう緑の人達居ないし、俺らがここまもんねえといけないだろ？」

隣で鉈を持った民兵がそう言うも、口だけで、自分は座り込んでいた。

伊丹達３ｒｅｃと、第四戦闘団が撤退した後、イタリカは、再び自分達のみで身を護らなくてはならなかった。

そうなる事を危惧し、自衛隊側も、騎士団が来るまでここに居ると進言したが、ピニャはそれを頑なに拒んだ。

自衛隊としてはほおって置けないものの、要請が無い以上、留まる訳にもいかなかったのだ。

占領に近い状態になってしまうのを恐れたのもあり、自衛隊は直ぐに撤退した。

その後、民兵達は既に限界となった体を引きずり、街を護っていたのである。

「にしても、騎士団とかいう奴らおっせーなぁ。速く来て欲しいぜ。」

下にいた民兵達が、「「はあ▪」」とため息をつくと、上にいた見張りが、「願いは叶ったぞ。」と言▪ってきて、皆が門の覗き窓を覗く。

そこには、こちらに向かうバラの旗と、騎士団が見えた。

「!!騎士団だ！」

「おい、門を開けろ！速く！」

民兵達のはりつめた神経は一気に緩み、中にはたおれこんでしまう者までいた。

しばらくして、何処かでみたような緑色の服の男を引きずりながら、騎士団はイタリカへと入った。

「ピニャ殿下。白薔薇隊、黄薔薇隊、只今参上致しました。」
「うむ。待ちわびておったぞ。」
フォルマル伯爵邸では、黄薔薇隊隊長である、伊丹をビンタした、ボーゼスと、富田に剣を向けた、パナシュと言う女性騎士が、ピニャに膝を付いていた。
「遅れてしまい、申し訳ありませんでした。お怪我など、しておられませんか？」
ボーゼスが心配そうな顔でピニャを見た。ピニャが笑顔で「大丈夫だ。」と返すと、ほっと胸を撫でおろした。
「ボーゼス、パナシュ、そちらも大事は無かったか？」
「ええ。でも、途中で敵の斥候らしき集団と出くわしました。一名を、捕虜として捕らえております。」
「そうか。よくやったぞ。今はイタリカ復興の為一人でも多く人手が欲しい。」
ピニャがそう嬉しそうに笑った。それが嬉しかったのか、ボーゼスは誇らしげに、「今、捕虜を連れて参ります！」と言い、近くの兵士に連れてくるよう命じた。
（別に見せなくても良いのだが）
と、言いたくなったがぐっと飲み込み、心の中で苦笑いして、椅子に腰かけた。
風が前髪を揺らす。
「涼しいな。窓なんて開けていたのか？」
「？夜間は虫が入ってくるので、開けておりませんが。何時から空いていたんでしょう。」
そうメイドが言い、窓の方を振り向く。そこには、音もなく侵入した、緑色の自衛官が立っていた。
「?!誰だ」
メイドが驚きながら暁目掛けてへ凄まじいスピードで突っ込んで行く。
暁はメイドが振りかざしたナイフを指で挟んで受け止め、膝でメイドの顎を軽く打つ。

するとメイドは意識を失って倒れた。
あっけにとられていたボーゼス、パナシュは剣を抜く。メイドもピニャを守るように立ち塞がる。暁は小銃を向けた。
「全員動くな。動いた場合、姫様を射殺する。」
と、低い声で言う。
「やらせるとでも？」
とピニャをボーゼス立ちが後ろに下げ、隠す。
暁はそれをみて、くすっと笑った。
「そんなんで隠せてるとでも？」
蛇のように絡み付く声でそう言うと、ばさっと風に吹かれたカーテンで、暁が一瞬見えなくなる。
そして、風が収まり、カーテンが萎むと、暁の姿は無かった。
「っ?!何処だ！」
ボーゼスやメイドが辺りを見回し、ピニャもきょろきょろと周りを見る。すると、耳元で、「ここですよ？」という声が聞こえ、背筋が震える。
ピニャは、気づかないうちに後ろから拘束され、ナイフを首筋に当てられていた。
「貴様！いつの間に！」
「さあ、いつだろうね？」
するとメイドがどさくさに紛れてボウガンを放つ。ボーゼス、パナシュは勝利を確信して笑みを浮かべる。・・が。
突如ピニャに突きつけられていたナイフ・・が引っ込められると、暁が消える。
ボウガンの矢は、暁が居た場所を通り、壁に突き刺さった。
また消えたことに驚くボーゼス達。周りを見回すと、ボウガンを放ったメイドが倒れた。
その後ろには、無表情の暁が居る。
「くそっ！」
白髪の女騎士、パナシュが暁に突っ込み、剣を降り下ろす。暁はそれをまたみ指で挟んで受け止め、そのまま、指二本で剣をへし折った。

パナシュは一瞬驚愕の表情になるも、すぐに立ち直り、剣を捨て、殴りかかる。が、暁は拳をいなし、腕を掴むと、足を引っかけ、勢いを利用して、床に叩きつけ、倒れたパナシュの頭に小銃の銃口を向ける。
「やめろ！アカツキ殿！何故こんな事をする！協定違反だぞっ！」
ピニャが暁に抗議をする。
「破ったのはあんた達だ。」
「何を言っている！妾達は違反など何も…！」
「今入ってくる奴を見たら解るよ。」
暁がそういうと、暁除く全員が扉を見る。すると扉が空き、兵士に引きずられた伊丹が中へと引っ張られ、倒れる。
それを見て、ピニャは真っ青になった。

失態

帝国皇女、ピニャ・コ・ラーダは、こめかみのズキズキという痛みに耐えていた。

理由は言うまでも無い。

先ほどの戦闘で、圧倒的な戦闘力を見せつけた、異世界の軍隊、「ジエイタイ」。

彼らの助け（というかほとんど自衛隊がやったけど）を得て、盗賊を壊滅させ、「ジエイタイ」と協定を結んだまではよかった。

やってしまった。正確には「やってくれちゃった」のである。

彼女の騎士団の一員である、黄薔薇隊隊長、ボーゼス、そして白薔薇隊隊長、パナシュ。

彼女らは、あろうことか往来を保証した「ジエイタイ」を襲い、捕らえた「イタミ」を

捕縛、暴行、強制連行と、散々にやってくれやがったのだ。

先ほどなんて、イタミを救出に来た「アカツキ」に危うく殺されかけた。

これもボーゼス達のせいだ。と、ピニャは恨みがましい顔で紙を破り捨てる。

このままではまずい。

しかし、この状況で使えるカードはほぼ無いに等しい。協定を結んだその日の内の失態を取り消すのは、もはや不可能であった。

「うーん・・・いっててて・・・」

ピニャが頭痛で悩まされている中、伊丹はフォルマル伯爵家の客間にある大きなベッドに横たわっていた。

「お目覚めですか？ご主人様。」

と、年老いたメイドが顔を覗き混んでくる。

「あ・・・はい。大丈夫です。」

伊丹は苦笑いをすると、現在の状況を聞いた。

メイドさん曰く、ここはフォルマル伯爵家のお屋敷の中だという。
自分は暴行等を受け、気絶していたそうだ。
「イタミ殿。これより、イタミ殿が回復なさるまで、この四人がお身の周りのお世話をいたします。」
年老いたメイドがそういうと、キレイ声を揃え、メイド服のスカートの端を摘まんだメイドさん達がお辞儀をした。
「ああ、じゃ、お願い。・・あと、メイドさん、」
「カイネ、でよろしくお願いいたします。」
「皆は何処へ？」
「解りません。あなたが捕まった後、逃げ去ったとは聞きましたが・・・あ、でも確か「アカツキ」という人がさっきまでこの部屋いましたよ。今は外の警戒をしているそうですが。」
「うん。わかった。ありがとう。」

～イタリカ付近の丘～
伊丹、暁と別れ、逃げた３ｒｅｃは、隊を二人に分けた。
車両等の留守番や、上への連絡等をこなす隊と、伊丹を救出する隊に別れ、今に至る。
「隊長、もう死んじゃってたりして。」
栗林がそう言うと、倉田が「そんそんなこと言わないで下さいよぉー」
と、双眼鏡を覗いていた。
「でも隊長、連れていかれる時、すごい暴力ふるわれてたし。」
「大丈夫だろ。だってあの人、一応レンジャー持ちだしな。」
富田かいつものペースでそう言うと、栗林が頭を抱えた。
「うっそ！あの隊長が・・・勘弁してよぉ・・・」
栗林はレンジャー徽章に憧れているらしい。
その為、怠け者でなんか頼りない伊丹がレンジャー徽章を所持しているという事が受け入れられないようだ。彼女の中では、富田や桑原曹長のような人物が持っているイメージがあるらしい。

何を話しているか解らず、キョトンとしていた特地の三人娘も、説明を受けて笑っている。
伊丹が選び抜かれた精鋭とは思えないのだ。
暇を見つければベンチに寝転がり、本（同人誌とかラノベ）を読みふけっているような伊丹は、そういった風には見えないのだ。
そんな事もあり、少し和やかになった所で、富田が立ち上がる。
「さて。そろそろ行きますか。」

三人娘が、城門をくぐる。
あんな戦闘があったのだから、警備は強化されているのかと思ったら、イタリカの警備はザル以下であった。
騎士団の正規兵も混じっているハズだが、咎められる事なく。というか何も言われずに領内へと入れたのだ。
エルフであるテュカが壁上に登り、精霊魔法で若干の警備を眠らせ、外に隠れている富田達に合図を送る。すると、
草むらから6人の自衛官が出てきて、領内へと忍び込んだ。
そして彼らは、伊丹を救出、暁を回収するというミッションを始めた。

伊丹と暁

あれからしばらく時間がたった。
伊丹と暁を回収に来た3偵の面々は、フォルマル家のメイドの案内で伊丹が居る部屋へと通された。
最初のセリフは、そろって「はあ？」という、意味が解りませんと言いたげな物であったが、
現在は皆楽しくおしゃべりしていた。
近くでは倉田がネコ耳メイドのペルシアさんにテンパりつつ自己紹介していたり、ソファーに座ったロゥリィとメイド長が話している。
「今すぐに撤収しなくても、良いかもしれませんね。」
「夜が明けたらおやっさん達呼んで、普通に帰りますか！」
「まあそうだな。こんな時間じゃ、町にも迷惑だろうしな。▪▪▪んじゃ、皆、夜明けまでリラックスって事で！」
▪伊丹がそう言うと、それぞれが了解！と返してくる。
「▪▪ああ、俺、▪▪ちょっとトイレ行ってくるわ。」
「解りました▪▪隊長、」
「ん？」
「一人で行けます？」
「行けるよ！いくつだと思ってるんだよ！」
そう返すと、皆に聴かれていたのか、部屋が笑いに包まれた。
伊丹は少し怠い体を起こし、部屋を出た。

――――

「ふぃー。スッキリしたぜ。」
伊丹はトイレから出ると、暗くて長い廊下を歩き、空いていた窓の縁によっかかる。
「お前は良いのか？」
そう言うと、上から暁が「大丈夫です」と返してくる。
「別に襲ってきやしないだろ？警戒してなくても良いぞ？」
「了解。でも、良いです。しばらくここに居ます。」

「一人で寂しく無いのか？」
　伊丹がニヤニヤしながら言う。
「俺もう２３っすよ？」
「あれ？２５じゃなかった？」
「確か２３です。・多分。」
「お前さんも大変だねえ。」
「歳が解らなくなっても大丈夫ですよ。困りはしないです。」
・暁は苦笑いしているようだ。
「・暁、今日の戦闘、何か思う所でもあったのか？」
「どうしたんすか、急に。」
「いや？・お前が一人で黄昏る時は大体そうだろ？」
「別に・でもまあ、思う所はありました。でも大丈夫っす。大した事じゃ無いですし。」
「良いから言ってみろよ。上官命令だぞ！」
「似合わないっすよ？」
「あ、やっぱり？」
　やりとりが何処か可笑しくて、笑ってしまう。二人の笑い声が重なった。
　笑いが収まると、暁が話を続けた。
「隊長、心配してくて嬉しいっすけど、本当にどうでもいい事なんです。」
「・解った。冷えるから中に入れよ。」
「了解です。」
　伊丹はパタパタとスリッパの音を廊下に響かせ去っていった。
　一人、屋根に寝転がった暁は、自分が殺害した盗賊の顔を思い出す。
　だが、悲しみも、後悔も、怒りも、沸いてこない。
　それは自衛官として、隊員として、兵士として、軍人としては当然の事かも知れない。だが、違うのだ。
　彼らは人間だ。撃たれれば血が出て死ぬ。斬られれば死ぬ。刺されれば死ぬ。
　しかし、自分はどうだろう。斬られるどころか、弾き返してしまう。

銃弾を撃ち落とす。
それに何より、体のほとんどは作り物だ。
何度目か解らない、しかし、数を重ねる度徐々に強くなる、自分が人間では無くなっていく
ような感覚を感じながら、暁は目を閉じた。

ピニャの葛藤

朝５：００。
日の出前のイタリカ、フォルマル伯爵邸の一室では、顔に赤い跡をつけた伊丹と、その部下、そして手を押さえつけられ、完全武装の暁と富田に挟まれたボーゼス、達が集まっていた。
帝国の皇女、ピニャの姿もある。
彼女は、頭を抱え、唸っていた。
それもそのはず。こちらの失点を消す為に、伊丹の所にボーゼスをやったのに、失点が増えていたのだ。
メイド曰く、「いきなり入ってきたボーゼスがイタミに暴行を加えた。」と。
なんでこうなった。
考えれば考える程頭痛が酷くなる。何故自分はこんな目にあわないといけないのか。
そうやって考える内に、頭痛が酷くなっていく。
これ以上考えた所で頭が痛くなるだけ無駄だ。そういう結論を出したピニャは、伊丹達、「ジエイタイ」に許される為にどうすればいいかを考える。
もう一度籠絡を？
いや。ダメだ。もう朝になってしまう。それに行かせる人間が居ない。ただでさえ人員が不足しているのだ。
いっそ全員を倒して隠滅する？
いや。不可能だ。あの数の盗賊を滅却し、単独で我々を制圧するような連中と戦える訳が無い。逆に皆殺しにされる。
いっそのこと、頭を下げて慈悲を乞うか？
これが現実的だろう。イタミの様な下級士官相手に頭を下げるのは何か癪だが、この際仕方が無い。
だがしかし、どこで謝罪をするべきか。
やはりしっかりとした場が好ましいし、誠意を伝える為、それなりの格好、それなりの用意が必要だ。

ならばしばらく準備をしなければならない。
……そんな事を冷静に考えていたピニャだが、富田の次の一言で一気にその冷静さは打ち砕かれた。
「あの、……自分たちは隊長を連れて帰りますんで、後のことはそちらで……」
――終わった。死刑宣告にも等しいセリフだ。
「ままま待ってくれ！えっと、あの、その、……あ、あれだ、あの、朝食を一緒に食べていかないか？は、腹もへっておろう！」
「いえ、お構い無く。……というか隊長、国会からの呼び出しがあって、昼前には帰隊していなければいけないんです。」
倉田の言葉をレレイが翻訳すると、ピニャはさらに青ざめた。
「こここ国会？よ、要するに元老院か？」
そう。ピニャは、伊丹が国会にこの協定違反を報告し、日本が戦争を仕掛けてくると勘違いしたのだ。
（どどどうすれば良い！どうすれば！……このままではあの地獄が、帝都に……）
ピニャは考えた。
必死に考えた。
国の為、自分たちの為に。
今やらねばならない事はなんだ？
――話し合い、そして元老院への報告の阻止だ。
――どうすれば阻止できる？
――伊丹より高位の者に、伊丹を説得してもらうしかあるまい。
……ならばやることはただ1つ。
私が、直々にアルヌスに居る敵の指揮官……ジエイタイの司令官の下に赴き、直接話す。
その為には……
「……伊丹殿ッ！」
「は、はい」
「妾も……妾もご同行させて貰っても良いだろうか。……今回の件、あなた方の上官に、正式に謝罪したい！」

「えっ・・・・ええええええ!!!」
「構わんな!」
「いや・・?・・あの、ちょ」
「か!ま!わ!ん!な!!」
「え、あ・・はい。」
・・・伊丹は、面倒事の予感がして、ガックリと項垂れた。

帰還

「ー以上。終わり。」
『了解。くれぐれも丁重にな。』ザッ
「…はぁ。」
「隊長、何て言われたんですか？」
ため息をつく伊丹に後ろから暁が話しかける。
「受け入れはＯＫだそうだ。」
「あらら…」
これで面倒になるのは確定である。しかも道中、事故でも起きよう物なら、国際問題だ。
しかも、伊丹の参考人招致の事もあり、あまり時間は無い。
伊丹も暁も、かなりハードなスケジュールなのだ。
「ま、とりあえず行くしか無いでしょ。あきらめてやりましょ。」
「そうですね。今まで税金で食わして貰ってたんだ。仕事はしっかりと。ですね。」
その後、高機動車にピニャとボーゼスをのせ、第三偵察隊は、イタリカを後にした。

ーアルヌス駐屯地
「やっと着いたなぁ。」
「長かったー！」
「営舎で寝たいよ…」
駐屯地に着くと、一気に疲れが出てきた。
今まで、ずっと徹夜で動き回っていたのだ。疲れない訳が無い。
だが、仕事はまだある。
呼び出された、伊丹、暁、栗林、富田を除く偵察隊の面々は、それぞれ後片付けを始めた。
桑原曹長の指示で、車両を戻し、銃弾、弾倉を返還。
そして、各自、小銃の整備に取りかかる。
実弾を撃った後の小銃の整備は、かなり念入りだ。

一度では終わらず、何日かは使っていなくても点検するのだ。しかも毎回ばらして。
体に染み付いているからといって、楽ではない。
しかも、呼び出されて行ってしまった暁達の小銃も整備しなければいけないのだ。
しかし、自衛官達は文句も言わず、ただひたすらに作業を続けた。

「失礼します。」
「おお、入れ！」
暁は、陸将室の扉を開け、中に入る。
「座っていいぞ。」
「はい。」
あまり飾り気の無いソファーに腰掛けると、狭間陸将の目付きが変わった。
「任務、ご苦労だった。おかげで帝国との大きなパイプが出来たよ。これで、目標へ、一歩前進できた。」
「ありがとうございます。でも、それは伊丹さんのおかげです。俺は命令に従っただけです。」
「そうか。今はゆっくり休んでくれ。」と言いたい所なのだが、申し訳ない。一つ、頼まれてくれないか？」
「なんでしょう？」
狭間は、机の引き出しから、白い腕章を取り出した。
そこには、緑色で、「要人警護」の文字が書かれている。
「もうすぐ、伊丹の参考人招致があるな。それに、こちらの人間も招く事となった。」
「何故です？」
「まあ、我々の事を信頼していないのだろう。こちらの出来事は、我々自衛隊と、政府しか正確に把握していない。あちらからしたら、嘘を言われても、それが嘘かわからない。そこで、自衛隊とは関係の無い現地の人間から話を聞きたいんだろう。」
「。つまり、政治家の下らないケンカに巻き込まれた訳ですか。」

「まあ、そうだな。野党はこれをネタに、一気に政府の支持率を下げようとしている。」
「そうですか。ま、政治に興味は無いんですがね。」
「そういうな。おっと、話がずれたな。つまりだな。」
狭間は机に黒い物を置く。
８９式５．５６ｍｍ小銃。陸上自衛隊の主力小銃だ。
「特地からの参考人の警護を任せたい。他でも無い君にだ。今回は、色々事情があってね。あまり大きく警護はできない。勿論、出来る限りの事はするが。」
「まあ、了解です。でも、そういうのって、公安とか警察の仕事じゃないですか？」
「本来は。な。だが、色々事情があるのだ。」
「外で、武装して良いんですかね？」
自衛官だからといって、いつでも武器は持ってはいけない。
任務ではないのに、銃、ナイフを持っていると、普通に逮捕されるのだ。
「大丈夫。これは任務だ。門を出て、そしてこちらに帰ってくるまでを期間とし、帯銃、発砲を許可する。特地の要人を守る為なら、だ。行き過ぎた行為をしようとした国民に対しては、拘束までは許可する。絶対殺すなよ。」
「了解。」
俺は、小銃を持ち、立ち上がる。
「頼んだぞ。」
狭間の声に、暁は、挙手の敬礼で答えた。

開いたゲート

―朝。アルヌス駐屯地、ゲート前。
そこには、二人の男が立っていた。
左の男、名は暁。
迷彩服に弾帯、サスペンダー、弾倉、マガジン、水筒、そして小銃を持っている。
左腕の腕章には、要人警護の文字が。
厚い生地の迷彩服を長袖で着て、日に当たっているが、汗をかいたり疲れた様子はない。
彼の体はほとんどが作り物。熱を受け付けない物質で出来ている為、汗を使って冷却する必要も、暑さを感じることも無い。
例え感じても、血管も、筋肉や骨すら通っていない彼の体は、汗を一滴も出さないだろう。
右の男、名は伊丹。
ただでさえ暖かい特地なのに冬用制服を着込まされ、制帽を被って、荷物をもっている。
手にはカバンと緑の上着。
防衛記念章も徽章も付いていない、階級章と名前だけの上着は、なにか寂しい。
そして暁とは対照的に、汗だくだくである。
「暑いってわかってんのになんで冬服きてんの？バカなの？」と思わないであげて欲しい。
何故なら、ゲートの奥。これから彼が行く祖国、我らが日本は、現在冬なのだ。
たまに資材を積んだトラックが通り、ゲートが開くたびにこちらに冷風が吹き込むのだが、
たまらなく気持ちいい。
そのため、彼は開くたびにゲートに向かって腕を広げ、風を受けていた。
それほど暑いのだ。

しかもこの時間帯。
日は上り、朝露を蒸発させている。
そのため、ムシムシした暑さが周囲を包んでいるのだ。
「暑い・暑い・なぁ、暁、」
「なんですか？」
隊長がだるそうに話かけてくる。
「お前暑くねえの？」
「まあ、体が少々特殊な構造ですからね。」
「作り物・だっけか？結構うらやましいな。自由に動くし、動力もいらないんだろ？」
俺は苦笑いする。
「結構不便っすよ？指紋が無いから色々めんどくさいし、コタツとかでぬくぬくしててもあんまり暖かくないし。あと調子悪いと、完全に感覚が抜けます。」
「マジか。お前も苦労してんだな。」
「ま、戦闘に支障は無いですし、いいんですけどね。俺、戦う以外出来ないし、やったことないんで。」
「お前、彼女とか居たことねえの？」
「高一の時居ましたよ。愛想尽かされました。」
「作らねえの？」
「作り物で人殺しの化け物と付き合いたいヤツ居ないでしょう、？」
「暁・お前、「隊長ー」
伊丹が何かを言いかけると、後ろから声がした。
振り向くと、栗林と富田、そしてテュカ、レレイ、ロウリィ、ピニャにボーゼスが居た。
「すいません、準備に手間取ってしまって。」
「いいや、良いよ。ははは。」
伊丹は苦笑いだ。
恐らく頭の中では「もっと速くこいよ畜生」とか思っているのだろう。
そんな事を考えていると、レレイ達に声をかけられた。

「アカツキ、」
「ん？どした？」
「ショウジュウがいつもと違う。ダンソウが曲がっているし、アクハの形状も異なる。そして何より、ぐりっぷと、すとっくの素材が違う。」
「本当ねぇ？」
「いつものより、少し短いわね。」
「ああ、コイツは８９式小銃。自衛隊で制式採用されてる小銃だ。」
「？ジエイタイで制式採用されているのは、「ロクヨンシキショウジュウ」ではなかったのか？」
「６４式は日本では退役済みの旧式なんだよ。陸自の部隊じゃもうほとんど使われてない。教育隊でも今は８９さ。」
「?!そ、それは本当なのかアカツキ殿！」
　ピニャが何故か驚いた表情でこちらを見ている。
「？はい。６４式は、もう４０年近く前から使われてましてね。１９８９年から８９式に変わってます。今ココに持ち込まれてたのは、予備として倉庫に置いてあったヤツ？です。」
「あれが・・・４０年前の旧式だと・・・ほ、他の装備はどうなんだ？センシャとかは！流石に最新の兵器だろう？」
「ええっと、７４式戦車はまだかなり使われていますが、最新のは１０式です。７４式は約３５年くらい前からですね。ちなみに７４式と１０式の間に９０式というのもあります。」
「た、大砲は?!」
「退役済みのが優先配備されていますが、現用の物もそれなりに持ち込まれています。」
「へ、へりこぷたぁは?!」
「あれは現用です。」
　ピニャは少しほっとする。
　流石に、帝国軍を圧倒的な力で蹂躙した装備が、あちらでは旧式だというのには耐えがたかったらしい。が、一部最新の物が使われていたので、少し安心したようだ。

（それでも３０～４０年は使ってますとか言ったら、絶望した顔になるんだろうなぁ・・言わないでおこう。）
そんな暁を尻目に、何故かピニャはほっと息をつくのだった。

「ゲート、開きます！」
門の管理をしている自衛官の声がすると、門を覆っていたコンクリートのドームの扉がゆっくりと開いていく。
そして、ゲートが見えた。
真冬の日本からの冷たい風が吹き込む。
「じゃあ、行こうか。」

「日本へ。」

そして、レレイ、ロウリィ、テュカ、ピニャ、ボーゼスの五人は、未知の日本へと、
暁、伊丹、栗林、富田は、久しぶりの祖国へと踏み出した。

日本へ

門。

突如として日本に現れ、銀座に悲劇をもたらした、異世界へのゲート。

そして、今。

数人の人間（＋α）が、門を超え、日本の土を踏んだ。

ゲートを覆う、分厚いコンクリートのドームの扉がゆっくりと開き、光がと冷たい風が差し込む。

伊丹や、富田達の故郷。日本の光だ。

ーー

武装した暁を先頭に、一同は門から出る。

真っ白な曇り空に目が一瞬眩むが、すぐに目が慣れた。

ふたたび回りを見ると、アスファルトに、立ち並ぶ四角いビル。

紛れもなく、日本。銀座だ。

「これが……ニホン……」

「なんという構造物だ…いったいどれほどの高さがあるのだ…」

「中に人……ということはぁ、あれは住居なのかしらぁ？」

「いや、中の人間は今アカツキが着ているメイサイフクと同じ柄。おそらく、ニホン側のジエイタイ。」

「居眠りしてるわね…ということは、あれは兵舎？」

「あの透明な壁がたくさんついた建物がぁ？…ニホンの人は見られるのが好きな変態なのかしらぁ？」

日本の感想を自由に述べている特地からの使節に、伊丹や暁達は苦笑いする。

「なんか、あらぬ誤解をしてますね…」

「見られる方が良いってのは、隊長だけですもんね！」

「俺にそんな特殊な趣味はねえっ！」

「まあまあ隊長。認めて下さい。」

「暁までっ！おじさん泣いちゃうよ?!」

「見苦しいんで、私達に見えない所で泣いてきて下さい。」

「随分と辛辣だな！」
　暁と栗林の言葉に、伊丹が激しく抗議する。
「まあ……その……隊長。…人間、それぞれ個性がありますし…」
　ここで富田の1発が入る。…本人はフォローしたつもりだろうが。
「……もうやだ……部下に虐められた……訴えてやる……」
「すいませんすいません。久しぶりの日本でうかれちゃって！」
　栗林が手を合わせて謝る。
「おう。随分と、楽しそうじゃあないですか。」
「!!」
　突然の後ろからの声に暁が反応。暁は、持っている89式小銃の銃口を、声の主の眉間に向けた。
「おおっと!!勘弁してくれ。敵じゃあないぞ。」
　声の主は突然驚きながら両手を上げる。
「!!…すみません。いきなりだったもので。」
　暁は謝ってから銃口を下ろした。
「あなたは？」
「情報本部から来ました。駒門です。今回、特地からの使節の警護に当たらせて頂きます。…そちらは、暁二曹かな。」
「はい。」
「上からの指示だ。二曹は伊丹二尉と特地からの来客の内、三名を警護せよ。ほかの来客については、こちらで対処する。」
「了解。」
「…で、あなたが伊丹二尉ですか？」
「あ、はい。」
　伊丹は書きかけの書類を机に起きながら答える。
「噂は聞いてますよ？それとついでに色々調べさせて貰いました。」
「色々？」
「伊丹耀司二等陸尉。平凡な大学を出て、一般幹部候補生で入隊。成績はブービー。部隊配属後の勤務はギリギリ可。見かねた上官が幹部レンジャーに放り込み、なんとか終了。……その後がちょいと面白かったよ。」

「…」
…レンジャー資格取得後、習志野駐屯地に異動。そして、S。特殊作戦群に異動。」
「…よく調べてるよ。」
伊丹が苦虫を噛みつぶしたような顔になる。
…だが、そんな伊丹よりも酷い状態の人間が、暁の後ろでうずくまっていた。
「嘘……そんなの嘘……こんなのが特殊作戦群?……認めない……認めない……」
暁と富田の背骨が震える。
「お、おーい、くりぼー、大丈夫?」
暁が顔の前で手をふる。……反応は無い。
顔を覗くと、目のハイライトが消え、いわゆる「レ○プ目」になっている。
これ以上の接触はこちらに害があるかもしれないと判断した二人は、そっと元の場所に戻った。
「…栗林は?」
「この世の不条理を呪ってます。」
「あらら。聴かせないほうが良かったかねえ。」
顎を弄りながら、駒門が笑う。
「でもね、伊丹二尉よりも面白いのがいましたよ?」
「誰です?」
「暁二曹。あなたですよ。」
それを聴いた暁が、目を細める。
「暁二等陸曹。6年前、一般曹候補生過程で入隊。こちらは伊丹二尉とは対照的に成績優秀。後期教育は空挺過程。その後習志野駐屯地へ配属され、空挺レンジャー過程を終了。数年間第一空挺団で過ごし、その後、第1普通科連隊へ異動。銀座事件に際して出動。…ここまでは普通だ。」
いろいろ普通じゃないが。
「その後はあんたら皆知ってるだろう?特派の第2自陣で派遣され、

３ｒｅｃに配属。」
「と、この辺は変じゃない。だが問題は、入隊前だ。暁二曹、あんた、7年前まで戸籍がねえだろ。」
「…よくご存じで。」
「あんたの経歴はこうなってる。平凡な家に、東雲って苗字で生まれ、小、中、高と普通の学校を卒業。両親が他界し、暁家に引き取られた。…だが、いくつかおかしいとこがある。死んだあんたの両親は、そもそも元々存在していない。ついでに、あんたの通ってた高校の卒業生に、あんたの名前は無い。」
「…」
「こりゃ、どういうことだ?あんたは本当に、信用出来る人間か?」
「…俺は服務の宣誓をした自衛官だ。スパイじゃない。…信じろとは言わないが、少なくとも俺は隊に尽くすつもりだ。恩があるからな。俺の経歴については今度、しっかりとした場所で話すよ。」
「…解った。この話は後にしようか。…全員、このバスに乗ってくれ。」

工作員

「ねえイタミ、あれは何？」
「ん？あー、ありゃクリスマスツリーだ。もうすぐクリスマスだからな。」
「クリスマスって？」
「独り身には辛い日だ。」
「「チッ」」
　暁達の乗ったバスは、銀座の町中を走っていた。
　特地から来た五人は、ガラスの窓に食いつくように外を見ている。
まあ、初めて来た異世界なのだから、当然かもしれないが。
「そういや二尉、まず何所へ？」
「うーん。とりあえず、青○かな。セーターにジーンズで国会はまずいでしょ。」

――

「おお！テュカ似合う！」
「そうかな？」
　試着室から出てきたスーツ姿のテュカが出てくる。
　ファンタジー世界に居たエルフがリクルートスーツというかなり変な組み合わせだが、着てみると良く似合う。
　外国人の大学生に見える。
「レレイとロゥリィは…そのままで良いか。」
「ええ。」
「問題無い。」
「そっか。…おっと、俺はコート買ってこなきゃ。」
　伊丹が小走りで階段へ向かうのを、場違いな迷彩服を来た暁が見送る。
「暁はバスの中に居たら良かったのに。」
「一応警護だからな。…流石に小銃持ってくる勇気はなかったけど。」
　栗林が苦笑する。
　小銃が無いからといって、目立たない訳がない。

暁はさっきから、回りの客の目線が気になってしょうが無かった。
が、そのおかげか、テユカやロゥリィは目立っていない。
「…！駒門さん！」
『ん？どうした？』
バスの中にいる駒門がやや頼りない声で答える。
「１２時方向に多分います。こちらで対処しますんで。」
『了解。気をつけろよ。』
俺は万が一の為に栗林に拳銃を預けると、店から飛び出した。

――

「ダック、標的に動きは？」
「ありません隊長。…どうしますか？」
「今回は偵察だ。情報を出来るだけ収集する。」
「コピー。」
伊丹達の居る店の向かい、古いビルの一室に、彼らは居た。
双眼鏡を手に、監視をする者、そしてサプレッサーを付けたＰＤＷを持った数人の人間。
彼らは、アメリカの工作員だ。
そんな彼らが伊丹達を監視していると、ドアがノックされた。
コン、ココン、ココココン。
乾いた音が静かな部屋に響く。
工作員の隊員に、緊張が走り、一斉に銃口がドアへと向いた。
「敵だと思うか？」
「…いや、見張りにだしたジョニーだと思います。」
「…そうか。開けてやれ。」
「なんだよ…脅かしやがって。」
隊員の緊張の糸がほぐれた。そしてＰＤＷを持った隊員がドアを開ける。
すると。
開いたドアから、顔面蒼白の隊員が入ってきた。
「うおっ!?おい、どうしたジョニー？」

慌てて隊員が近寄ると、ジョニーと呼ばれた隊員は、何かを呻きながら倒れた。
「おい、ジョニー、しっかりしろ、ジョニー！」
「安心しなって。死んでないからさ。」
「?!誰だ!!」
いつの間にか、ドアの前に男が立っていた。２０位だろうか。自衛隊の迷彩服を着ている。
「ハロー、ＣＩＡの皆さん。いきなりで悪いけど、武器を捨てて手を上げて貰えるかな？」
男は隊長に微笑みながらそう言う。…が、もちろんそんな話には乗らない。
人数は圧倒的に有利。しかも男は丸腰だ。
男の後ろの隊員が銃を向け、引き金に指をかける。
（バカな男だ。一人、しかも丸腰で入ってくるとは。恨むなら自分を恨め。）
隊員が引き金を引く。サプレッサーで押さえられた鈍い発砲音が響く。放たれた弾丸は、一直線に男の頭に向かっていき、途中で停止した。
「?!なっ！」
隊員達がどよめく。それもそのはず。放たれた弾丸が、空中で停止しているのだから。
しかし、流石プロ。うろたえながらも、もう一度引き金を引く。しかし、今度は弾すら出なかった。
引き金を引く音が空しく響く。
「あーあ。辞めときゃ良かったのに。」
男はそう言うと、ＰＤＷを撃っていた隊員に手を向ける。すると隊員がもだえ始め、血を撒き散らして爆散した。
「?!ドム！…貴様、何を！」
「ちょっと血を逆流させたんだよ。銃も無い事だしね。…これ結構魔力使うから好きじゃないんだけど。」
男はそう言うと、隣にいた別の隊員に手を向ける。

向けられた隊員は横にローリングして手のひらから逃げる。が、
「動くなよ。」
転がり、立ち上がっていた隊員の首が飛んだ。
そして、男がこちらに向き直る。
「最初は武器さえ捨てりゃ見逃すつもりだったんだがね。…恨むなら自分を恨みな。」
「何を!……っ!ぁっ!……」
残っていた工作員ももだえ始めた。
急に、息が出来なくなったのだ。
声も出ず、何も出来ない。
「あんたらの横隔膜を固定した。苦しいだろう?すぐ終わらせるよ。お休み。」
その言葉と同時に、工作員は残らず爆散した。
残ったのは、おびただしい血だけである。
男…いや、暁は口元の返り血を拭う。
その顔に、感情は存在していない。
踵を返し、部屋を出た暁は、ゆっくりと階段を降りていった。

国会へ

「さあ、もうすぐ到着ですぜ。二尉、準備させといてくれ。」
「了解。テュカ、レレイ、ロウリィは降りる準備。暁は小銃を持って一番最初に降りてくれ。何かあったら絶対に三人を守れ。俺は大丈夫だ。」
「了解。任しといて下さい。」
　暁は小銃に実包入りの弾倉を差し込みながら答える。
「栗林、富田は残って第二会場へ。ピニャ殿下とボーゼスさんの警護は公安と警察がやるそうだから大丈夫だけど警戒は怠るな。」
「「了解」」
「殿下とボーゼスさんは、二人と一緒に別の会場へお願いします。あ、非公式なのもあるので、絶対に二人の目の届かない場所には行かないで下さい。」
「わ、わかった。」
「ようし。じゃ、気合入れてけ！」
「「応っ！」」

――

「伊丹二尉、国会へ到着しました。」
　バスを運転していた警察官がそういうと、ドアが開く。
「よし。暁、行ってくれ。テュカ達も来てくれ。」
　は、小銃を持ち、警戒しながらバスを出る。その後ろにテュカ、ロウリィ、レレイ、伊丹が続いて行く。
　外にはスーツ姿の男と、数名の警察官が待っていた。
「お待ちしておりました。伊丹二等陸尉、特別地域からの参考人の方々、警護の暁二等陸曹ですね？」
　レレイが頷き、暁と伊丹が敬礼する。
「ご案内します。どうぞこちらへ。」
「隊長、俺が最後尾で行きます。」
「判った。頼むぞ。」
　暁は最後尾に回ると、槓桿を引き、初弾を装填した。

――

「あーあー。つまんないなー。」

薄暗いオフィスビルの一室。

並べられたデスクに腰掛けた少女はそう呟き、何かを蹴った。

蹴られたそれは、灰色のカーペットに赤い線を描きながら壁まで転がり、座り込んでいる左腕と右足が無い男の足に当たって止まった。

「工作員は強いって聞いて寄り道してみたけど……大した事無いなぁ。期待して損したよ。ボクの時間をどうしてくれるのさ？」

少女は机に置いてあったボールペンを握ると机から降り、男の目の前でしゃがむ。

「ねえ？生きてんでしょ？ボクの質問に答えてよ。」

「……黙れ化け物。」

「酷いなー。女の子に化け物って。失礼だよ？」

「へっ……可愛いとか冗談だろモンスター。女の子だなんて笑わせるぜ。」

「むっ、つくづく失礼だなーおじさん。ま、どうでもいいや。」

少女は立ち上がる。

「どうせ死んじゃうんだし。」

少女は、笑顔でそう言った。

「……化け物が！」

男は残った右腕で拳銃を取り出し、少女に向かって乱射した。

燻った真鍮の薬莢がカーペットに散乱し、マズルフラッシュが部屋を照らす。

弾倉内の弾丸を撃ち尽くした拳銃は、ホールドオープンし、沈黙する。

「はあ……無駄だって言ったのに。まあ、そういうの嫌いじゃないけどね。」

拳銃弾をマガジン1本分、至近距離で喰らったハズの少女は平然とした顔でそういうと、手に持つボールペンを男の肩に突き刺した。

男に鋭い痛みが走り、呻く。

ボールペンは肉をえぐり、かなり深く突き刺さっていた。

「そろそろ行こうかな……じゃあねおじさん。」
少女はボールペンを手放すと、コートから紙を取り出し、それを破る。
破れた紙は淡い紫色の不気味な光を発する。
そして、男に刺さったボールペンも、同じように光った。
そして次の瞬間。誰も触れていないボールペンが勝手に動き出し、男へどんどん深く突き刺さっていく。
「があっ！……畜生……待ちやが……れ……」
少女はそれを無視し部屋を出て行く。
ドアが閉まり、部屋は一瞬の静寂に包まれ、そして。
「?!がっ！……あ……あ……あ……あああ！」
男の悲鳴と、何かが飛び散る音が響く。
ほんの数ヶ月前まで多くの会社員が働いていたオフィスは、屍と薬莢、血液が散乱する地獄と化した。
「ああ！速く会いたいなぁ♡」
薄暗い廊下に、少女の嬉しそうな声が響く
「待っててね♡半天使の自衛官さん♪」
頬を桜色に染め、屈託の無い満面の笑顔。
少女の目は、狂気と慕情で深く混沌に染まっていた。

巻き込まれる暁

国会、控え室。
制服のネクタイをピッチリと締めた真面目モードの伊丹に完全武装の暁。
それに異世界から来た亜神に魔法使い、リクルートスーツのエルフという中々カオスな空間だ。
「さて……段取りは以上だ。レレイは二人のフォローを頼む。……暁！」
「へい」
「お前は何かあったらテュカとレレイを護れ。俺には構わなくて良い。」
「元からそのつもりっすよ」
「……冷たい奴。」
伊丹がうなだれる横で、ロウリイが抗議の目線を向けている。伊丹がロウリイの名前を挙げなかった事に不満があるのだろう。
頬をぷくっと膨れさせているのはなんとも可愛らしい。……そしてどこか神秘的だ。
「参考人の皆さん、こちらへお願いします。」
ドアが空いて、高そうなスーツを着た職員がそう知らせた。
「よし！じゃあ行こうか！」

――

『参考人の方々が入って来ました！』
『今、参考人の四人が入って来ました……いえ、五人です。見たところ……自衛隊員の方が二人居るようです！』
『一人は……どうやらライフルを持っているようです！』
暁達が入場すると、ものすごい数のカメラが出迎えた。フラッシュが絶え間なく点滅し、そっちを視ていると目が眩みそうだ。
暁達は手はず通り、用意された席へと向かう。
伊丹、ロウリイ、レレイ、テュカが着席したのを確認すると、暁は周囲を警戒しながらレレイの席の横へ移動した。

暁の任務は警戒。なので座らず、気も抜かない。
俺は銃を立て筒の状態にすると、周りを見渡す。
見た所、ほとんどは一般人。
だが報道に混じって、それっぽい人間もチラホラ居る。まあ予想はしていたが、結構工作員やらが潜入しているようだ。
「参考人が揃いましたので、再開したいと思います。」
議長がそういうと、野党側に座る一人の女性議員が手を上げる。
「議長。始める前によろしいでしょうか。」
「民先党、蓮包議員。」
議長に許可されて議台に上がる。
「民先党の蓮包と申します。参考人聴取の前に申し訳ありませんが、そちらにいらっしゃる自衛官の方に質問があります。よろしいですね？」
……噛みつかれた。
なんとなく予想は出来ていたのだ。
なんとしても与党ｓａｇｅに？げたい野党。まあこうなるだろうとは思っていた。
しかも銃持った自衛官がのこのこ入ってきたのだ。
あいつらは恐らく自衛官なんて頭悪いしボロ出せるとか思っているのであろう。
「お名前は。」
「……」
黙秘しまーす！
「お名前はと聞いて居るんです。」
……まあ通用しませんよね。
「特地方面隊所属、暁二等陸曹です。」
「そうですか。暁二等陸曹に質問があります。よろしいですね？」
「議長！これは参考人の聴取とは関係ありません！」
後ろにいた与党の議員が声を上げる。
ありがたいが多分無理だろう。
暁、堂々と小銃を持ってるし。

「……暁二等陸曹。議台に。」
「申し訳ありません。任務中でありますので。」
……苦しい。
ダメ元で言ってみるが、これも駄目だろう。
「ならば防衛大臣代理。彼の任務を解いて下さい。」
与党の席に座った防衛大臣の代理が、戸惑った顔を見せる。
「あの……彼に対する直接の指揮権を私は持っておりませんので……」
「どういう事ですか？」
「ええと、まあつまり、彼は特地方面隊の隊員でして、彼個人への指揮権は特地域方面隊隊長及び直属の上官にしか……方面隊や幕僚長へは防衛大臣本人、いや、最高指揮官である総理大臣しか。どちらにせよ、個人へはちょっと。」
「ならば彼の方面隊の隊長とやらに任務を解くように伝えて下さい。」
「今からですと特地へ連絡するのにかなり時間がかかりますが……」
……初めて自衛隊の複雑な指揮系統が役に立った気がする。普段は面倒で煩わしい限りだが、こういう時には便利だ。
「暁二等陸曹、任務に支障の無いようにお願い出来ませんか？」
おい。

おい。

何言ってくれてるんですか防衛大臣代理。
見事に後ろ弾を頂いた暁が心の中でため息をつく。
見ると蓮なんとかさんの口元が緩んでいる。
……コイツ二重国籍だっけ？工作員として射殺してやろうか。冗談だが。
「……分かりました。自分に答えられる範囲の事であれば、お答えします。」
……こうして、暁も巻き込まれる事となった。